

NO. 60  
WINTER  
1978

# 英語展望

ELEC BULLETIN

特集：国際人の条件

國弘正雄・川村恒明

宮本昭三郎・山口英雄

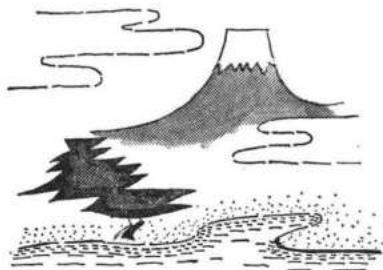


# 英語展望

NO. 60  
WINTER  
1978

## ELEC BULLETIN

Edited by Natsuo Shumuta and Akira Ota  
The English Language Education Council, Inc.  
3-8, Jimbocho, Kanda, Chiyoda-ku, Tokyo



### 【国際展望】

東欧の旅.....	中島文雄	2
通じる英語とは.....	東後勝明	4

### 【特集】国際人の条件

神話としての国際化.....	國弘正雄	6
日本人は国際人になりうるか.....	川村恒明	10
まず自らの価値観を.....	宮本昭三郎	12
人類愛をもってこそ.....	山口英雄	14

### Community Language Learning and

Counseling-Learning .....	Lillian Soga	16
バラッドの世界(その10).....	平野敬一	21

### ハワイ研修報告記.....

橋内 武 27

### ELEC 海外英語研修.....

29

### 【英語教育の情報と資料 1】 教授法の回顧.....

田中春美 35

### 【新刊書評】『訳詞と解説：まさー・ぐーす』上・下巻.....

平野敬一 39

### Testing and Experimental Methods.....

浅野紀和 42

### 新刊紹介.....

44

### 新刊案内.....

46

### 展望通信.....

47

表紙デザイン

太田英男



## 東欧の旅

中島文雄

去る8月、津田塾同窓会の「東欧をめぐる旅」というのに参加してブルガリア、ルーマニア、ユーゴスラビア、ハンガリー、ポーランド、チェコスロバキアの順で6か国の首府を巡遊した。アルバニアと東ドイツが含まれていないが、大体社会主义国を旅行したと言えよう。全くの駆足旅行で皮相的な観察しかできなかつたが、それでも行ってみて初めてわかったことが多かつた。

まず最初に驚いたのは、アテネからソフィアへ行くバルカン航空の機内の汚さであった。はえが一杯なので手で追っていなければならぬ。座席のガタピシしているのもいくつかあった。ソフィア空港で降りてから空港ビルまで旅客をはこぶバスが、すし詰めでひどい目にあつたが、もう1台空いたバスがあり、それが先に発車した。係員が旅客を誘導するということではなく、全く放つたらかしなのである。いつもこうというわけではなく、あとで乗ったポーランド航空などは普通であったが、最初の印象はわるかっただ。

ソフィアからブカレストまでは列車、またベオグラードからブダペストまでも列車を用いたが、いずれも大へん混雑してコンパートメントに入りきれず、廊下にも人があふれていた。その上みなが大きな荷物を持ちこむので窮屈であった。駅では荷物を預かってくれないし、ボーターはいないわけではないが、車内まで荷物を運んでくれないので、自分でかつぎこまなければならず、重労働であった。われわれの座席は予約がしてあったので、一応坐ることはできたが、定員6人のコンパートメントに8人入れられたりした。そうやって座席をあまし、車掌が他の乗客にさばいてチップをかせいだらしい。乗客は手荷物のほかに弁当や水も持参している。日本の終戦直後を思い出させるそういう列車風景であった。

社会主义国の政府はいずれも外貨獲得に懸命らしい。ソフィアのグランドホテルは外人観光客用らしく、この国としては不相応に立派なものであった。建物はよかつたが食物はまずかった。ブカレストのホテルも同様で、やたらに塩辛く、われわれの味覚に合わない。それより

も困ったことは夜の食堂のバンドのやかましさであった。両ホテルとも客へのサービスのつもりであろうが、むやみとボリュームをあげて耳を聾するばかりのロック音楽を演奏する。食卓では隣りの人と話もできない。モスクワのレストランも、このようにやかましい音楽をやるそ�であるが、こうすればブルジョワ人種には受けると思っているのであろうか。あまりの音にもっと静かにと頼んだが駄目で、ついに食事を放棄して退席した人もあった。

ベオグラードへ来てから後は、食堂でバンドに悩まされることはなくなり、食物の味も普通になった。今までザラザラしていたトイレットペーパーもやわらかくなつた。ユーゴでは従業員が5人以内なら私企業が認められているとガイドが言ったが、他の社会主义国ではすべての仕事が国営公営なのであろうか。経済のことには無知な私には、これらの国の実情はわからないが、どこでもサービスのわるいことは共通である。外貨獲得のためのドルショップでも売子は不親切不愛想である。買物はレジへ行って金を払い、その領収書をもって品物を受取るのであるが、ある店ではレジの女の子が本を読んでおり、客がくるといかにも面倒くさそうな顔をした。プラハの店であったか、日本人客が同じ品物を順々に買っていったところ、途中で急に1ドル値上げしてしまった。買物のことではないが、ワルシャワでショパンの生家のあるZelazowa Wolaへ行くことになり、貸切りバスで1人20ドル取られた。ワルシャワからわずか1時間足らずの距離である。別の日本人グループは1人14ドルで昼食つきであった。

今度の旅行で社会主义国の通貨がいかに不安定なものであるかがわかつた。もちろん各国とも1ドルが自国通貨でいくらという公定のレートはある。それから外人旅行者優待のため特別レートがきめてある。たとえばルーマニアでは1ドルが公定で5レイ、旅行者レートでは12レイであり、ハンガリーでは1ドルが10フォント、旅行者は20フォントといった具合である。ところが街頭

に出るとどの国でも、必ず闇ドル買いがそばに寄ってくる。ブルガリアでは1ドル25レイで替えようと話しかけられた。買物はドルショップですることにすれば、その国の通貨はいらないので、あまり両替もしなかったが、ワルシャワのホテルで食堂の飲物代にと思って10ドル替えた。公定は1ドル24ズオティであるが、旅行者だから33ズオティで換算、330ズオティ受取った。それから食堂へ行きぶどう酒1本とて食事をしたが、このぶどう酒は7ドルだという。これは $33 \times 7 = 231$ ズオティに当るわけであるから、そのつもりで払おうとしたらボーランドの金なら700ズオティだという。今しがた帳場で両替してきた10ドル分の金を全部出してても足りない。だから7ドル払えばグッドペーパーだとウェイターはいう。仕方なくドルで払ったが、全く不合理なことである。闇では1ドル120ズオティ以上らしい。

プラハでは1ドルが6コルナ、旅行者レートでは9コルナであった。ある喫茶店でコーヒーを飲んだところ、一杯9コルナなので、ホテルで両替した人は9コルナ即ち1ドル支払った。両替しなかった人は1ドル札を出したところ、おつりが11コルナきた。この店では1ドルを20コルナに勘定しているのである。ドルで払った人は、ただでコーヒーを飲み、その上11コルナもらったことになる。一体社会主義国の通貨とは何なのであろう。おそらく国外ではほとんど無価値なのではなかろうか。

思えばこれらの国は不幸な歴史をになっている。15世紀後半以来何百年もの間トルコの支配をうけたり、独壇露の強国によって分割されたり合併されたり、第一次世界大戦後独立できたと思ったら第二次大戦でドイツに抑えられ、ドイツの敗戦で自由になったかと思ったらソ連の支配下に入れられ、その上相互民族間の抗争もあり、苦労の連続である。ボーランドもチェコもハンガリーも、また東ドイツも人民が叛乱をおこしたが、いずれもソ連の戦車に弾圧されてしまった。ユーゴーは少しちがうがTitoなきあと、ソ連がどうであるかは予断を許さない。ブルガリアはソ連の優等生だそうであるが、他の諸国は反ソ感情がつよいようである。ワルシャワで最も大きい建物はソ連が寄贈した文化科学宮殿であるが、この建物の頂上から見たワルシャワが一番美しい、この建物が見えないから、という笑い話がある。（文化科学宮殿という名称は日本語の案内書によるもので、英語やドイツ語のパンフレットでは、この建物は無視されている。）ソ連の寄贈した大きな建物はブルガリアにもあった。そしてその前にはレーニンの像が立っていた。ソフィアにもレーニン像のある広場があり、またナチスからブルガリアを「解放」した恩人ソ連兵をたたえる大きな記念碑

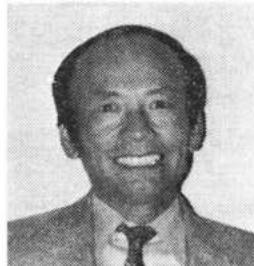
もあった。われわれの感覚からいうと、あまり恩着せがましいことはしない方がよいと思うのだが、ソ連の感覚はちがうらしい。これはウィーンの話であるが、このまちは戦後しばらくのあいだ英米仏ソの4か国に管理された。そのソ連地区であったところに、ソ連兵の像をのせた高い記念柱が立っている。そしてその前に噴水がある。その噴水の前に立って記念柱を見上げると、吸きあげる水にすっかりかくされて天辺のソ連兵の像も見えない。そうなるように噴水が設計されているのである。

ワルシャワ観光のとき大きな自動車工場の前を通った。ガイドの説明によると、この工場は1年間に1,750台の自動車を生産するという。あまりに少ないので皆がびっくりして、日本なら1日と言いたいところだが、まあ1月だろう、1年はまちがいだろうと言い出したので、ガイドも自分のことばに自信がもてなくなり、わざわざ工場にバスをとめて訊きに行ったところ、やはりまちがいではなく、台数はその通りなのだが、ほかに自動車の部品を多量に作っているとのことであった。ソ連の下請けをやらされているのである。

社会主義国はパスポートの検査が厳重である。日本でビザをとるときも何枚かの写真を添えて出し、手続きが複雑であった。現地に来てみると入国出国に時間がかかる。ホテルでは滞在中パスポートを預かってしまう。国境でも役人が一応パスポートを取りあげて検査する。鉄道でユーゴーからハンガリーに行くとき、ユーゴーの国境ではパスポートの検査に2時間、ハンガリーへ入ってからまた検査に1時間、ブダペストへ着いたのは夜中になってしまった。チェコからオーストリアへ行くときはバスであったが、チェコの国境ではやはり1時間ばかり待たされた。ところがオーストリア側の検査は10分ですみ、待つ間もなくバスが動き出した。一同思わず、共産圏脱出！と叫んだ。

旅行した6か国の人口を概算してみると、ブルガリア850万、ルーマニア2,050万、ユーゴスラビア2,050万、ハンガリー1,030万、ボーランド3,300万、チェコスロバキア1,450万、合計1億730万で日本の人口より少ない。それでいて各国とも言語がちがう。ユーゴーには4つの公用語がある。宗教も南の方はギリシア正教、北の方はローマカトリック教が優勢であるが、その他ハンガリーやチェコにはプロテスタントもあり、ユーゴーにはイスラム教徒もいる。共産党政府は宗教を認めないのであろうが、各地の教会に集まる人を見るかぎり信仰はおとろえていないようである。こういう複雑な地域をまわってみて、つくづく日本は仕合せな国だという感じを新たにした。

（津田塾大学長）



## 通じる英語とは

東後勝明

### はじめに

最近、「日本人は日本人の英語でいい」という考え方が広まっているようです。これは一体どういうことを意味するのか考えてみたいと思います。

「相手に通じる英語であれば、多少文型が不自然でも、発音が不備でもいい。かえってその方が愛嬌があつていい」というのが、そうした主張をする人の共通の考えのように思われます。ところが私はこの考え方にはどうしても納得がいきません。なぜならば、この考えをどんどん押し進めて行けば教師はどんなにまずい英語を教えても、学習者はどんなにまずい英語を身につけてしまっても、すべてが「日本人の英語でいい」のひとことで正当化されてしまう危険を含んでいるからです。

例えば最も基本的な発音の誤りとして、教師が、「出発する」という意味の leave の母音と住むの live の母音を混同して教えてしまったとします（筆者はこれまでにいく度となくこうした現場に遭遇っています）。それを習った学習者はこの 2つの音の区別がつかないまま、外国人と英語を話します。Where do you live?（お住いはどちらですか）のつもりで誤って Where do you leave? と発音していたとしても、たしかに会話の流れやその場の状況からたまたま通じてしまうと、その結果ひとりよがりになり、「通じたからいいんだ」と決めつけ、その 2つの発音の違いについては、さほど真剣にも考えなければ、以後練習もしなくなります。同様にこんどは子音の l と r を混同して、rice のところを lice と言ったとしても、これも前後の状況から大体通じれば、また「通じたからいいんだ」と安易に考え、発音練習をしなくなってしまいます。

こうした姿勢はちょうど人間のからだに例を取ると、目が悪くなると「まあ少しぐらい目が悪くても食事が出来るし働くからいいさ」となぐさめ、その治療を積極的にせず、胃が悪くなると「まあ胃が悪くとも、こうして生きているのだから」とそのままにし、歯が悪くなる

と、「まあ歯が抜けても死ぬことはないだろう」と治さないでいるのと同じで、結局はからだ中がボロボロに朽ち果ててしまいます。

英語の場合も「なんとか通じたからそれでいい」とか「日本人の英語としてはこの程度でいいんだ」などと言って安心している間に、病が少しづつからだを蝕ぼむよう、不正確な発音が少しづつ定着し、やがて、そのことに気がついた時には、もはや手のつけようがないということになってしまいます。

こうして「日本人の英語」をよう護する傾向は音声表現の面で特に強く、そのため現場での音声指導が、ともすると軽視され、その改革の必要性が叫ばれていながらも遅々として進まないのが現状ではないでしょうか。

### 日本人の英語とは

「日本人がアメリカ人やイギリス人と全く同じ発音で英語を話す必要はない」ともよく言われます。確かにその通りだと思います。しかしそのことは、とりもなおさず「だから日本式の通じにくい不正確な英語であってもいい」という、安易な妥協を正当化する理由にはなりません。

確かに学習者が日本人であり、日本で育ち日本で教育を受けた者である以上正しい英米の英語をモデルにして、その修得に努力をしても、本国人と全く同じ英語はなかなか身につかないかもしれません。その英語の中には当然音声の面からも、話される内容面からも、日本人を感じさせる物がにじみ出てくるものです。

すべての英語学習者にとって、眞の日本人の英語とは、より正しい、より本国人に近い英語へのあくなき挑戦の末、身につく結果であり、決して言語修得途上の安易な目標であってはなりません。いわんや自己の能力不足やなまけ心を隠す「かくれみの」であってはならないのではないでどうか。

## 通じる英語とは

よく日本人の英語をよう護する場合、「通じればよい」ということが言われます。確かにその通りですが、それでは一体どういう英語が通じる英語なのかということについては、なかなか規定されません。

ただ「通じればいい」「通じる英語であればいい」ということが呼ばれているだけで、これでは学習者も教える方も、ことばの魔術にかかったようなもので、一体何を基準にして、どの辺を目標にして、その「多少不備でも通じる英語」修得に励んでいいのかがわからず、結局は本物の英語という厚い壁の前に屈し、その結果止むなく、「まあ日本人は日本人の英語でいい」と自らを慰めることになってしまいます。そこで私の提案は、まず、通じる英語の最低の基準を定め、その範ちゅうに入るものの目標として教え、学ぶことです。

## 英語の文法と音法

書かれた英語が通じるものかどうかの一つの基準としてはすでに文法があります。文の組み立て方に一定の法則があり、少しでもそれにかなうように、つまり文法的に正しい英語なら一応は通じる英語の目安になります。

ところが、それを音声に表現する時には、「ここまでできていれば通じる」という規準が全くありません。

文の組み立て方、語の並べ方、その変化のさせ方などに一定のきまりがあるように、話すことば——音声の英語にも、音の流れ、個々の音の結びつき、リズム（強弱の型）、イントネーションなど、一定のきまりがあってもいいはずです。こうした音声での表現方法に関するきまりのことを私は「文法」に対し「音法」と名づけてみます。この音法は、まだ「文法」ほど体系づけされていませんが、音声の英語が、通じるか否かを判断する一つの基準となります。

## 話すことばの要素

私達の口から飛び出すことばは次の3つの要素から成り立っていることがわかります。個々の音、リズム、それにイントネーションです。個々の音は語の辞書的意味、つまり文字づらの意味、を伝え、リズムとイントネーションはその裏にある話者の心理的、感情的な意味を伝えます。

これを、よく食卓で聞かれることば Pass me the potatoes, please. を例に取って考えてみましょう。文字では5つの単語があり、文法的にはその各々に機能に応じた名称があります。ところが同じ文を、話すことばとし

て耳でとらえると、文字で見る時のように単語と単語の切れ目ではなく、ただいくつかの音の連続体ででき上っていることがわかります。つまり [pæs mi ðəpət eɪt ouz pli:z] という18個の音の連続体がこの文の音声の英語ということになります。こうした個々の音が音声の英語を作り出す基本単位です。

次に、スピーチには強弱のリズムがあります。そこには一定のパターンが作り出されます。この例文では pass の [æ] のところ、potatoes の [ei] のところが強くなるためその強弱関係を図解でわかりやすく表現しますと □□□□□□□ (強弱弱弱強弱弱) となります。さらにもう一つの大切な要素、イントネーションをつけなければ音声表現は完成しません。これもほぼ一定のパターンをもってあらわれます。この例文の場合 potatoes の第一音節までがやや高く平坦で、第二音節の [ei] で一気に下まで下がり、あとはそのまま平坦になります。

以上の3つが音声の英語を支える最も大切な柱であり、その内のいずれか一つまたはそれを組み合わせたものが音声の英語を通じさせるための決定的な要素として働きます。基本的な文法の規則を破った文が意味をなさないのと全く同じように、音法に従わないで話された英語は正確に通じないということが言えます。

例えば、前述の Pass me the potatoes, please. を口にする場合、もし potatoes の強弱を間違え、日本語式に [pōteitou] と発音すれば、個々の音がどれだけ正確でも、イントネーションがどれだけ正しくても通じなくなってしまいます。これは、リズムに関する音法、「文中で最も相手に伝えたいことばの正しいアクセントの位置は、その語の個々の音よりも大切な場合が多い」によるもので、この場合極論をすれば potatoes の [p][t] の代わりに [b] と [d] を用いて [badéitouz] と言っても、[m] と [n] を用いて [ménéinouz] と言っても、リズムの型が弱強弱としっかりしていればなんとか通じるかも知れません。この場合聞き手は、その語のリズムの型を、その語の識別の第一の手がかりにしているからです。

同じ文について、イントネーションに関する音法「命令文の最後を軽く上げると依頼のことばとなる」をあてはめ、最後を軽く上げれば、相手に依頼をする気持があらわれ、心理的な意味の上からは、こうしたイントネーションのパターンが please ということばの代りをすることになります。

こうした音声に関するさまざまな法則——音法——はこちらの英語を的確に通じさせる一つの基準になるのみならず、相手のことばを正確に聞き取り理解するのにも大いに役立ちます。

(p. 15へつづく)



## 神話としての国際化

國 弘 正 雄

9月16日から19日にかけての4日間、メキシコ市で、海外子女教育シンポジウムが開かれた。毎日新聞社の主催であった。私もパネリストの一人として出席、さきごろ帰国したところである。20年ぶりのメキシコだった。

出席者は作家の城山三郎氏ほか、京大の小林哲也教授(教育学)、慶大の土時巖周教授(社会学)、東京外語大の山口昌男教授(文化人類学)、加藤学園理事長の加藤正秀博士(国際金融論)など学界教育界から数名、それに外務文部両省や国際交流基金の関係者など、多岐にわたった。団長役は国際キリスト教大学の中川秀恭学長(宗教学)がはたされた。

異色の参加者としては、『新西洋事情』ほかの著書でマスコミに華々しく登場した深田祐介氏が、城山氏と並んで特異な発言を行なった。三菱電機の人事部長はじめ、何人かの実業人も、現地メキシコと遠くブラジルからの参加者を含め、各パネルに出席、そぞれ実務家の立場から意見を述べた。

このように日本からの代表団は、学、官、財、それに操縦界(まとい)の四者構成で、とかく狭いタコツボにとじこもり、タコツボ間交流がむずかしい日本の実情を考えば、ユニークな組み合わせであった。学界からの参加者も、官立、私立の両方にわたり、いくつかの専門領域にまたがっていた。私が参加を決したのも、この構成ならば、異タコツボ間の風通しの改善も多少は期待できようと考えてのことであった。

まず日本内部で、異なるタコツボ間の障壁がとり払われぬかぎり、異文化——ということは、異人種、異民族、異言語、異国籍ということだが——とのコミュニケーションなど、可能なはずではなく、国際化とやらも絵空事にすぎないと年来主張してきた。それだけにこの構成は、想像力を刺戟するものがあった。

メキシコ側から、国際的ヴァオリニストとして令名の高い黒沼ゆり子女史が参加されたことも、会議の盛り上りを助けた。ご主人は著名な文化人類学者——メキシコはこの分野で、世界的に高い水準にある——で、人も羨

む国際結婚の成功例だが、水際立った司会ぶり、流麗なスペイン語、それに気働きを惜しまない人柄とが、会議の成功にどれほど寄与したか判らない。しっかりとした専門をもち、ことばも達者なら、臆する色とてない同女史——女史ということばが憚かられるほど、初々しい、ただし聰明な人だった——のような人をこそ、国際人というのであろう。第2パネルの司会のほか、全体会議の議長役もつとめられた。

私は十時議長のもと、第3パネルの副議長を仰せつかり、日本人の国際性にまつわる諸問題とその克服方法について、基調報告を求められた。1時間の余にわたる報告を行なったのは、分科会さいごの午後であった。これらの報告と討論は、近く毎日新聞社から一本として刊行される。

はじめこのシンポジウムについて、毎日の山崎宗次部長——この企画は彼の brain child であった——から知られ、外務省に出席を求められたとき、率直にいって海外子女教育というテーマに、少なからずひっかかりを覚えた。

教育問題は山積している。日本に在って正規の教育過程を修めつつある子弟にとってさえ、問題は山積している。在外子弟が数万のオーダーに上るとはいえ、その数は圧倒的に少ない。教育全般がこんなにも問題をかかえている際に、海外子女教育だけを取り出し云々するのは、本末顛倒ではないか、という疑問が私の心をかすめたのである。

むろん私は、海外に赴任駐在する日本人が激増していることを知っていた。恐らくその数は、こんごとも着実に伸びつづけよう。さまざまな事由から、やがて日本の製造工業のかなりの部分が、海外——さいきんの英語ではよく offshore という——にその設備や機能を大幅に移転せねばならぬ可能性も、密かにささやかれるに至っている。

だが、その子弟の教育が煩いとなり、海外勤務をうと

ましく思う働き盛りの人士が増えたことも事実である。海外に進んで出かけようというのは、独身者か、さもなければ、子弟の教育が仕上った、中高年層であるとも噂されている。そのことが、日本の海外活動から活力を奪い、戦力——ぞっとするようなことばではある——を著しく弱めている、ともいわれる。私のようなへそ曲りは、その方が日本の海外活動に落ち着きと成熟度を加える点、むしろけっこうではないかと思いたくもなるが、実情はそんなやわなものでないらしい。

私が若干関係している外務省ですら、教育盛りの子弟をもつ外交官が在外勤務を喜ばぬ傾向がみられるという。これは由々しい事態である。対外関係にその存立を賭けたこれから日本を思えば、私のへそ曲りなど、ひま人のひまごとにすぎぬのであろう。

そういえば、一昨々年、第1回ジャパン・キャラヴァン講演旅行でニューヨークを訪れた際、日本協会での会合に集まった多くの在留邦人が、喰いつかんばかりの勢いで、私どもに質問の矢を浴びせ、関係者への伝言を迫ったときの熱気がよみがえってきた。

それにしても、と私はまだ証然としないものを覚えるのだった。海外子女教育が重要なことはわかる。でももっと優先順位の高い問題がひしめているのでは……。

第一、もっとも感受性に富む若い時代に、異郷に在って異客となり、異文化の息吹きに直接触れるのできる子女は、恵まれた存在といってよい。彼らは、日本国内にあっては考えられぬような原体験を身につけることで、恐らくは一生かかっても使い切れぬだけの資産をわがものとすることができます。そのような好機を手にしない多くの児童生徒と比べ、幸せの一語につきる。長い目でそのメリットの大きさを評価しえない両親など、近視眼流もきわまっている。

これが私の思い込みであった。

そしてメキシコでの数日を経たいま、当初の思いの、少なくともその重要な一部が、私の方的な思い込みであったことを痛いほど感じている。どうやら、やっとのことで、光を見ることができたらしい。恥ずかしさをあえて、以下私の回心の経緯ないしはその理由を語ることにする。

問題は2つもしくは3つに大別される。

第1は、海外子女がかかえる問題はそのまま日本国内の教育問題を投影している、という点である。

第2は、第1の問題自体、日本のいわゆる国際化——好きなことばではないが、慣用に従う——がどれほどむずかしいかを如実に示している、という事実である。

海外子女の問題は、実は彼らの両親にまつわる問題である、という点を付け加えてもよかろう。両親の頭の切りかえが十分でないために、彼ら子弟が不必要なまでに苦しまされている、という面である。

そして両親の頭の切りかえが未だしたこと自体、日本国内の教育問題、ひいては日本社会のひずみを照り映えている、といえるのではないか。

第1の点についてだが、さきほど私は海外子女は恵まれている、といった。この点についての私見をひるがえすつもりはない。他の子弟には与えられない体験をもつことが、マイナスであるはずではなく、またそうであってはならない。少なくとも本来的には、プラスでなければおかしい。

彼らは、紙の上の、抽象的な外国人ではなく、生きた、斬れば血の出る、喜怒哀楽をともなった人間としての外国人と、肌を接する原体験をもったのである。それがマイナスでありえぬことは、3歳の童児にも明白だろう。彼らは遊びを通じ、生活体験の共有を通じ、自分の属する集団とは別な、人間集団の存在を身に沁みて知るに至る。こんなにも確かに、望ましい体験の質はほかには考えられない。違いのわかる男、というコマーシャルではないが、彼らこそ、違いのわかる子供たち、なのである。違いがわかることが、いわゆる国際化のとりあえずの第一歩であることはいうまでもない。

いや、国際化云々はしばらく措くとしても、異質なもののが存在への認識が、どれほど人間のぶを厚くし、より多くのものに対して共感と同情とをもちうるという意味で、ふところを深くしてくれるか、計り知れない。とくに日本のように、国内に大型の異人種や異民族集団をもたず、世界大でもまれな单一集団——人類学では族内婚的という術語を用いる——の場合には、このメリットが国内研修できにくくだけに、幼時に原体験することの意義は、ひときわ大きい。

核家族の子弟よりも、祖父母を含む3代が同じ屋根の下に住む子弟の方が、人間的なやさしさと思いやりに富む、という教育学者の指摘も、この間の事情を伝えていく。血のつながりがあるとはいえ、祖父母はあきらかに異質な文化の体现者である。祖父母との接触の度合いが高いほど、異文化に触れる機会も多く、したがって異質なものへの親和性をもちやすい、と結論しても、牽強付会のそしりは免れよう。

しかもである。地球がますますその物理的な距離を圧殺し、空間を圧縮しつつあることは、故トインビー教授の annihilation of distance、ライシャワー元大使の shrinkage of space という造語を俟つまでもない自明の

理である。同時に、日本の地球社会への依存度が、並外れて高いことも、いまさら繰り返すまでもない。資源、市場、科学技術、学問などあらゆる面においてである。

であるとすれば、彼ら海外子女が、幅の広い人間たりうる点で、他の子弟より恵まれた立場にあることは疑いない。個人として、人間としてこれは願ってもない恩沢である。

日本全体としても、こんご彼らに期待するところは多大といわねばならない。国際化——このことばには私は若干の留保があり、むしろ異文化接触の増大とでもいうべきだと思うのだが——が、次代の現実であることに想到すれば、人間としてのぶが厚く、異質な人間集団との原体験に富む彼らに、第一線に立ってもらうよう求めたとしても、苛酷な要請ではないはずである。もちろん、彼らをきちんと遇していればの話だが……。

ところが、われわれの彼らへの処遇は、どうやらまつとうではなかったようである。彼らはその異質な体験の故に、むしろ punish されてきた。入試時のハンディをはじめとし、外国で取得した単位の認定——中高、大学の両レベルにおける——や、資格付与その他をめぐり、差別に近い処遇を受けてきた。

これは彼ら個人にとって先ず、付隨的には日本人全体にとっても大きな損失と断ぜざるをえない。私は彼らを特別扱いして、その特異な体験の故に、rewardされるべきだと唱えるものでは、必ずしもない。少なくとも punishされるのは不当ではないか、と主張したいのである。そして現実は、不当に近い差別が存在するらしい。

さきに私は、海外子女がかかえる問題はそのまま日本国内の教育問題を投影している、といった。彼らに対する不当に近い差別に、私はそのもっとも大きな影を見出し、その端的な例を、大学入試の現状にみる。それはこういうことである。

日本の大学入試は、もちろん学校による難易の差はあるにもせよ、基本的には同じ理念で統一されている。それは、人間の能力の判定にあたり、怖るべきほどの画一主義や一律性がまかりとおっていることに如実にあらわれている。価値観の多様化が叫ばれて久しい、にもかかわらずである。

これはほんの一例だが、東京大学を頂点とする有名大学は、なんでも一通りは満遍なくこなせる能力を、人間のもつ唯一望ましい能力とみなしているかのごとくである。入試にあたりおどろくほど多岐にわたる何課目ものテストが課され、それが唯一無二の尺度となっているの

は、その証しである。つまりは、全天候型の、平均値の高い人間のみが能力の所有者と認定されているのである。

むろん私も、何でも一通りはこなせるのが、一つの能力であることを否定はしない。

ただそれが受け身の姿勢と往々にして同一であることに目をそむけるわけにはいかない。人間、17にも18にもなれば、何か1つ2つの点に鋭く傾斜し、他は捨てかえりみない、という姿勢が生まれたとしても、不思議ではない。理数科は好きだが、英語や社会はどうも、という少年は、はたして能力がないのだろうか。満遍なく、一通り何でもこなす、いわゆるよい子よりも、むしろ自律的な能力を備えているとはいえないだろうか。そういう偏頗な、それだけに好き嫌いのはっきりした自主性のある少年の方が、人間としてより成熟した、頼もしい存在だという視点は、まったく考えられないだろうか。

私とて、いやしくも大学を志す以上、各教科とも、ある最低線だけはいって欲しいとねがう大学当局の気持を理解しないではない。だが、能力判定の基準があまりにも画一かつ一律であることには、怕れを覚えざるをえない。

日本の官僚が、与えられた問題の解決策を応急的に策定することには長じても、「未萌の機を察し」、おこりうべき問題をあらかじめ予測し、遠き慮りをはかる点においては、もののみごとに貧寒かつひよわなことを、われわれはいやというほど経験させられてきた。今回の円高ドル安傾向にしても、官僚出身の現首相以下、財政当局の狼狽ぶりたるや、先見性の不足、想像力の欠如を、さまざまと露呈している。そのことが国民生活に与えるマイナスは大きい。にもかかわらず、転ばぬ先の杖、という俚言(りごん)は、彼らの語いにはないかのごとくである。

彼らの多くが、東京帝国大学法学部出身の、まがうことなき秀才エリートであることはいうまでもない。ただそのエリートと判定されたそもそもの基準が、ありうべき事態を想定し、いわば問題を作り出す能力よりも、与えられた問題を忠実に解く能力のみに、一律的に傾斜していたとすれば、出発点自体に問題が大ありとはいえないだろうか。

その端的な例を、私は現行の入試制度の根底に横たわる、能力判定基準の画一主義にみる。つい先日の毎日新聞のあるコラムが、「新聞なぞ一所懸命に読んで、あれこれ自分の頭で考えてたりしては、入試には通らないよ」という父親の言葉を戯劇的に紹介していたのは、このあたりの機微を衝いて間然するところがない。

しかも画一的な判定基準の根底にあるのは、人間の不可思議さ、人間の多様性に対する安易かつ無関心な姿勢である。人間の能力が、わずか一、二度のペーパーテスト、しかも一律的な基準のそれで判定しうると考えているとすれば、それは元来が多面的な人間の、計り知れないほどの潜在的 possibility と、めくるめくばかりの多様性に対する冒瀆であり、そこに垣間見られるざらついた感性と、微塵不遜とは標然として思わず息を呑ましむ態のものである。そこには人間への深切心など、微塵もない。植物同様、人間にも早稻と晚手があるという時間的な多様性も無視されている。一回の入試が、その子の一生を大きく決めてしまうにもかかわらずである。

たとえば、鎌倉期の祖師方におけるような、人間実存への凝視の深さと、人間存在への洞察の確かさとは、いったいどこに消え失せてしまったのだろうか。人間の問題をこれほどまで機械的、画一的、計数的にみるようになった日本人に、私は暗い頽廃のかけりをみないわけにはいかない。

せめてアメリカの例にならって、各大学が複数の判定基準を準備し、そのどれかにあてはまるようなら、入学を許可し、その後の経過をみるというしくみを参考にできないだろうか。一定人数は、能研テスト、心理テストなど、潜在能力で判定し、学科テストを課す場合も、満遍型と偏頗型、さらにはその中間型と、アクセントをつけた形でそれぞれ別わくを用意する、というのがアメリカの方法である。場合によっては、狭義の学科成績に多少の難があっても、統率力とか、人間的迫力とか、経験の特異性とか、一芸一能——スポーツを含むこともある——に秀でているとかが、判定の重要な基準たりうる。

しかも A 大学と B 大学とは、異なる基準の（アメリカ英語にいわゆる）mix がちがう。C 大学、D 大学もむろんである。こうなれば、能力判定基準の組み合わせは無限に近く拡散し、なんらかの形の「能力」さえあれば、それを評価してくれるどこの大学には入学可能であり、少なくとも、現在の日本のような入試地獄——よく米人は infernal entrance examination と呼ぶ——はその存在理由を喪う。よくアメリカにも入試競争はある、という論者がおり、私もやみくもには否定しないが、日本のそれとは全く異質であることは、いうまでもない。

このような理念次元でのハードルを越えれば、あとは技術的な問題にすぎない。大学間の単位の相互乗り入れなど、ささいな問題と化すだろう。同一大学でありながら、学部間の転部転科がむずかしく、新たに入試にパスしなければなどという、恐るべき状態も自ずと解消に向かおう。

そしてなによりも、いまのような公卿の館さながらのエリートではなくて、人間的にも知的にも骨太でたくましい、事後処理に長じた官僚的優等生型ではなくて、問題を事前に提起し、それへの対処に赴くのをおそれない人材、が育っていくであろう。日本の明日が求めるのが、独創と実験を怖れない骨太な存在であることははっきりしている。予想される国際環境のきびしさとあわせ、いまや日本も世界も、お手本も教科書もない、未踏時代に入ったからである。道なきところに道をつけ、荒地に鍬を入れる作業は、他律的・いい子的な優等生タイプの、在来型エリートの能くするところではない。

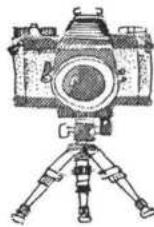
同時に、理念次元でのギャーの切りかえさえできれば、海外子女の苦難も大幅に取り除かれよう。彼らを苦しめているのは、なによりも日本の教育を覆う画一主義だからである。与えられた恩恵をフルに活かし、人間のもつ多様性への理解と、異文化異言語への親炙を深めることで、一個の人間としての奥ゆきを増すばかりでなく、到来必至な国際化時代への備えを、かためていくことができるにちがいない。

それが日本人全体にとってのみならず、彼ら一人一人にとってどれほどのプラスであるか、改めて指摘するまでもない。

以上、私は第 1 の点、つまりは日本国内の教育問題の投影としての海外子女教育について若干の感想と鬱懃を筆にしてきた。第 2 の国際化上の障害について述べる紙幅はもはや残っていない。ただ、同じ日本人でありながら、画一的な尺度から洩れる存在は、これを無視して顧みない姿勢が、国際化に逆行することだけは明らかである。国際化とは、自分たちとは異質な存在を、異質であると認めつつ、しかも人間としての共感を失なわずに、それとの架橋作業をこころみていく態度や技能、気質や経験をわれわれ一人一人に強要するからである。

同じ日本人を、たまたま恣意的人為的に設定した物差しに合わないから、というだけの理由で排除していく、どうして国際化、というよりは異文化接触、などできるであろうか、というのがメキシコでの数日を過しての私の感懷であった。ましてやその排除対象が、どれほどの可能性を潜めているかわからない、前途有為な少年少女であるに至っては、その人間観の機械的画一性に、私は青白く燃える鬼火でもみたような、うすら寒いものを覚えた。いまや国際化の声のみかまびすしいが、日本と日本人のかかえる業は、底知れずふかく、重苦しい。

（国際商科大学教授）



# 日本人は国際人になりうるか

—国際理解教育の重要性—

川村 恒明

「戦争は人の心の中で生れるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない。」これは有名なユネスコ（国際連合教育科学文化機関）憲章の前文の冒頭の一句である。それではなぜ人の心の中に戦争のようなおぞましいものが生まれるのか。世界の諸国民が「相互の風習と生活を知らない」ことが相互のいたずらな疑惑と不信をかもし出す共通の原因であり、それを除去するために、教育、科学及び文化を通じての諸国民間の協力を促進せねばならないと同憲章は続けている。

「相互の風習と生活を知る」ことは、たしかに容易なことではない。今は国際化の時代だという。年間300万人近い日本人が世界の各地を旅し、海外から来日する人々の数もうなぎ昇りに増加している。エネルギー、食糧等の基幹的資源のほとんどを海外に依存するわが国にとって、外国とのつき合いは今や避けて通れぬ、いわば日常茶飯的なものとなっているように思われる。

しかし、本当に日本は国際化しているのであろうか。そもそも国際化するということはどういうことであろうか。多量の資源を輸入し、街に外国製品がはんらんすることをもって国際化したと考える人は、よもやあるまい。ユネスコの表現を借りれば、日本人は諸外国の人々の風習と生活、つまり文化と価値観を正しく理解しているのであろうか、ということである。相互の風習と生活を知る、ということは決して単に知識として外国の存在や事物を認識するということにとどまるのではないはずである。自分たちが日頃なじんでいるものの考え方や行動の様式とは異なった考え方で行動を律している人々がおり、彼らは彼らに固有の価値の体系を持っていることを率直に認め、理解する、つまりそれらの人々を偏見や予断を持たず客観的に認識し、理解するということが第一であり、さらに進んでそのように自らと異なる人々に対して、自らのありのままの姿を正しく理解させることが何よりも必要なはずである。簡単に言えば、それは国と国とのかたくるしいお付き合いということではない。

く、それぞれの国民が市民生活のレベルで、異国人を親しい隣人として理解し、お互いに気持ちよくお付き合いできるようにするということであろう。

わが国は、長い間東洋の片隅の島国で独自の文化を培ってきた。狭い、しかも海洋によって隔離された島の中で、单一の民族、単一の言語による生活を営んできたことが、先に述べた異質のグループの人達との付き合いの仕方をマスターするうえに大きな影響を及ぼしたことは否定できぬところである。しかも明治以来ひたすら欧米諸国を中心に、その知識や技術を個別的に吸収することに多大の努力を費やしてきたため、それらの国の姿を総合的に理解したり、あるいは、わが国に対する諸外国の理解を深めさせるための努力に欠けてきたことも事実である。

このような諸々の条件が重なって、わが国民の多くが、市民生活のレベルでの異文化の理解ということが不得手であったということは、これはあるいはやむを得ないことであったといえるだろう。しかし外国との付き合いがこれほどまで求められるようになってきた時代において、いつまでもそのようないわばスマートなお付き合いは苦手であるとか、あるいはカネの力で何とか切抜けようということでは済まされなくなっているのは、われわれの多くが既に気のついているとおりである。

ユネスコは、昭和49年、第18回総会において、「国際理解、国際協力及び国際平和のための教育並びに人権及び基本的自由についての教育に関する勧告」という長い名称の勧告を採択した。このような勧告が改めて行われること自体、「相互の風習と生活」を理解し合うことの困難さと、それ故にこそ、そのことをいっそう進めることの重要性が世界的にさらに増大しつつあることを、象徴しているといえよう。この勧告では、すべての段階の教育に国際的側面と世界的視野を持たせることと、すべての民族、その文化、価値及び生活様式に対する理解と尊重の必要性が、繰り返し強調されている。そして、

人々は異なる文化とその相互の影響、ものの考え方や生活様式の相異点を相互に理解し合わねばならず、つまり、文化の多様性の認識と相互評価に立脚した、「文化間理解」Intercultural Understanding の感覚を身につけることの重要性を主張しているのである。

このような文化間理解の感覚を育てるために、教育は如何なる役割を果たすべきか、ということがこの勧告の次のテーマになるわけであるが、わが国の場合、先に述べた歴史的、地理的諸事情とも関連して、学校内及び学校外を通じて教育に期待するところが非常に大きい、といえるであろう。すなわち、わが国の教育は、近代的教育制度を確立した明治以降、いわゆる皇国主義を一方の柱に、広く知識を世界に求めることを他方の柱として発展してきた。わが国教育の主要関心事は、日本国民としての国民的自覚の高揚と、近代国家形成のための手段としての、欧米の科学技術知識の吸収にあったのであり、ここにいう文化間理解の観点まで思い及ばなかったのである。

戦後このような教育のあり方にに対する反省と、ユネスコ憲章に示された精神に触発されて、国際理解教育 Education for International Understanding の必要性が、繰り返し主張されるようになった。学校教育におけるユネスコ協同学校計画、ユネスコ・クラブの活動、あるいは社会教育の分野における民間活動としてのユネスコ協会の活動等がそれである。ただ、その理論的主柱がユネスコ憲章の精神にのみ置かれていたために、これらの具体的活動の名称が示すとおり、それはユネスコ活動と表裏一体をなすものとして発展し、同時にユネスコ活動のわくを脱し切れないものであったことは否めない。そのため、ユネスコの指標に基づき、人権の研究、他国の研究及び国際機関の研究を三本柱とした活動は、学校・社会教育の中で普遍的な形で根付くことができず、一部の熱心な活動家による理論研究中心の活動にとどまることになった。

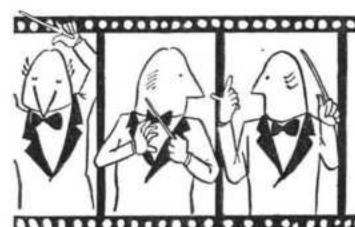
今、われわれはユネスコの精神を基礎としつつも、さらに広い立場から、国際理解のための教育を推進せねばならず、また、それを可能にするだけの社会的諸条件が整いつつあると思われる。例えば小・中学校レベルの教育における大きなインパクトのひとつとして、海外子女教育の発展を挙げることができる。海外に在留する2万人近い子どもたちに対する教育、また、年間5千人に達する海外からの帰国子女の受け入れを通じて、外国というものを、隣の県と同じような形で身近かな存在として、小・中学校の現場で意識せざるを得なくなっているのである。

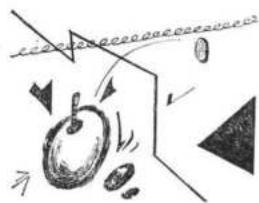
国際理解教育は、一方通行であってはならず、あくまでも相互の理解が基礎となる。他国を理解することは同時に自国、自国民、自国の文化を見直すことであり、その基盤に立って、それを他の国民によりよく理解させることにつながる。このような観点をさらに進めて行けば、例えば資源、環境問題等の人類の生存と福祉にかかわる世界的な課題を、地球市民的な意識からグローバルにとらえるという発想に育っていくはずである。言葉を代えて言えば、宇宙船地球号の乗組員の一員として、相互の連帯感を育て、共通の課題解決のために協力することが不可欠であることを理解させるということであろう。このような国際理解の精神を育てるための条件は、日常生活のいろいろな場面でととのいつつあり、これを体系的にとらえ、整理し、日常の教育活動の実践に生かしていくための努力が求められているのである。

以上のような観点から、日本人は国際人となりうるか、という問いかけを吟味したとき、問題は国際人となりうるかということではなく、国際人である（ならばならぬ）ことを前提として、如何によりよい国際人となりうるかということしかありえないよう思われる。われわれは好むと否とを問わず、以上のような意味での国際理解の感覚を身に付けざるを得ない時代に生きており、現に大多数の日本人は、1世代前とははるかに進んだ形でそのような感覚を身に付けている。

その意味で、日本人が国際人たり得ることについて、いささかの疑念も抱いていないが、ただ、これからさらに急速に国際化の進展する時代を迎え、これに受身の形で対応するのではなく、一歩進んで積極的に新しい時代の担い手を育成するためには、そのことに主眼を置いた教育、つまり国際理解のための教育をさらに充実することが、急務であると思われる。幸い国際理解教育は、関係者の努力により、ひとつの停滞を脱して新しい発展のステップを進めようとしている。その具体的な内容、方法は様々であっても、学校内、学校外を通じて、文化間理解ということに明確な問題意識を持った教育の推進が切実に期待されるゆえんである。

（文部省国際教育文化課長）





## まず自らの価値観を

宮本 昭三郎

推古15年（西暦608年）の秋、8人の遣隋留学生は、大使小野妹子に随行して、日本を離れた。7、8世紀ごろの日本の知識人たちの意識にうかぶ世界とは、言うまでもなく東アジアの世界であって、その文化圏の中心には、先進国中国の長安、洛陽の壘が横たわっていた。してみると、玄界灘の波濤の彼方に遠ざかる日本の島影を背にした留学生の胸中に去來したものは、先進国の高度の文化に直接ふれる機会が訪れて来たことに対する感動か、それとも、自分の人生が、日本という枠組みからはみ出して、まったく未知の海原へ向って船出したことにに対する不安と期待の念であったろうか。

これらの遣隋、あるいは初期の遣唐留学生たちのおおくは、短かくても十数年、長ければ三十数年という、現代の常識では考えられないような長い年月、と言うよりは人生を、彼の地で送っている。このような長い年月を中国語の世界に生きた彼らが、感覚的にも、また思考様式の上においても、日本語の枠からはみ出さなかつたはずはあるまい。日本へ帰ったのちも、自分の母国と知りながら、日本と自分との間のどこかに存在するすき間を意識しつつ晩年を送ったようと思えるのである。

もう20年も前のことになるが、私は、ロンドン大学の東洋アフリカ学院の地下にあった書庫のうす暗い片隅で、書架をぎっしりと埋めている『西藏大藏經』や『大唐西域記』などを前にして、井上靖氏の『天平の壘』に読みふけたことをおぼえている。日本へ帰る知人がおいていってくれた本であったが、私を惹きつけたのは、遣唐留学生の心理が、みごとに描きだされていたことであった。そしてその心理描写は、現代の留学生にもあってはまると言ってよかつたのである。

遣唐のころのように、中国と日本とのあいだの文化的格差が大きかった時代にあっては、当然「もろこしかぶれ」がおおかつたと思われるし、その反対の、言わば国粹主義的な考え方方が生まれる余地は、まだあまりなかつたのではないか。さらに、適不適をわきまえた上で、中国の文化を攝取しようといった冷静な態度が現わ

るのは、もっとものちのことであったと思われる。

いずれにせよ、日本の外国文化攝取の歩みはこうして始まり、鎖国時代と軍國主義時代という2つの谷間をはさみながらも、明治の文明開化、そして戦後の大規模な西欧文化の導入へと続いているわけであるが、最近「国際人としての日本人」などという言葉がしばしば紙上に現われ、また人々の口にのぼることは、この歴史的な足どりと無縁ではないように思う。ただし、「国際人」という言葉は至ってあいまいに使われているため、その定義如何によって議論の方向も変ってくるわけである。

ふつう「国際人」とは、外国のコトバと知識を身につけ、貿易をはじめ各種の分野において、日本語の枠組みの内外で活動できる人を意味していると思われるが、日本人は過去において、度合いのちがいこそあったにせよ、いくどか「国際人」を指向した時代があったわけである。ただその足あとをふりかえってみて、すぐ気がつくことは、これまでの「国際人」になろうとする試みは、いずれも「先進国指向型」とでもよべるものであったということである。このことは、明治の鹿鳴館時代や、第二次大戦後から現在に至る西欧文化、とくにアメリカ文化の導入を考えれば明らかであろう。

ふりかえってみると、戦後、「国際的」になるということは、「歐米的」になることと同じであった。それは、かつて1千年のむかし、長安の壘にあこがれたころとあまり変わらない姿勢ではあるまいか。長い年月を西欧ですごしたのち日本に帰って来た私を一驚させたのは、新幹線や、都心の高層ビルではなくて、巷に氾濫している英語の文字であった。それも、外国人がよく利用する場所とか施設ならむしろ当然とも思えたが、場末の店までが、「営業中」とか「閉店」のかわりに英語の札を出していることは、主として上流階級の日本人だけが影響された鹿鳴館時代とはくらべものにならない規模で、日本の英語化が進んでいるしとしか私には見えなかった。これほど英語が必要な時代であるとするなら

ば、かつて英語を国語にせよと主張した森有礼は、まさに先見の明をもっていたことになろう。

このような言わば「英語一辺倒」の現象の底には、やはり欧米模倣の心理が働いていると言わざるを得ないが、日本の歴史を通じて執拗に現われるこの模倣の精神はいったい何に起因するのであろうか。もちろん日本人に独創性がまったくないと言うのはあたらない。千数百年のその歴史の流れは、時として独創の輝きを示した。しかし、全体的に言って、日本人は模倣に「優れていた」と言っても過言ではあるまい。

日本の国民性のこの一つの特徴は、やはり日本社会の成り立ちに起因しているのではあるまいか。島国であるという地理的条件と、異民族による侵略をうけなかった日本は、たぐいまれな均質社会を生みだした。しかも、長いあいだ続いた封建制度のもとでは、個の確立は困難であったし、個人の行為の選択は集団主義を基礎にしたわけである。このような社会においては、自主性が発達する余地がすくないのがむしろ当然と言わなければなるまい。そして自主性が養成されない環境で、独創が生まれるはずもない。こう考えてみると、そこには、世界でもめずらしいほどの旺盛な知的好奇心をもつ反面、自己の生き方に自信をもてない日本人の姿が、国際舞台に浮びあがってくる。日本人論がしばしば紙上を賑わすということも、この辺の事情を裏書きするものであらう。

戦後たしかに日本人の活動地域は全地球にひろがった。これほど多くの日本人が、これほど多くの国々で、各種の仕事に従事しているということは、日本人にとってまさに有史以来の現象と言ってよからう。しかも、短期間の観光とは言え、旅行の時期ともなれば、何万の人たちが、アメリカへ、あるいはヨーロッパへと足をのばす時代となった。そして国内には英語が氾濫しているとなれば、日本人は、今や「国際人」としての資格をそなえるようになったかのような印象をあたえるのである。

だが、外国のコトバと知識を身につけてさえいれば、「国際人」なのであろうか。私はやはり国際間に活動する人であれば、その人の仕事が何であろうと、国際間の理解をすこしでも増進させる努力をなすべきだと思う。とすれば、欧米人の亜流にはしるよりも、まず日本のほんとうの姿を知った日本人であるべきであろう。シェイクスピアは読んでも、万葉の世界はまったく知らないとあっては、順序が逆なのではあるまいか。

しかし日本人が「国際人」であろうとするとき、何よりも障害となるのは、やはり地理的、歴史的な背景から生まれた日本人の異民族に対する態度そのものであろ

う。雑居の経験をもたない均質社会に育った人は、異分子に対して抵抗を感じるのがむしろ当然と言ってよいが、同時に、異民族との正常な人間関係の領域を非常に小さいものにしてしまう傾向をもつようになる。こうして海外にある日本人は、地元の人たちと打ちとけないで、自分たちの「城」にだけ閉じこもっているといったような印象を与えるわけである。

また問題は海外にあるときだけ現われるわけではない。「国際人」としての条件を備えているかどうかは国内にあるときにもっともよく現われてくるのではないかろうか。私に言わせれば、「国際人」としての第一の条件は、英語などを知っていることよりも、異民族に対する偏見が少ないことである。アメリカで黒人問題が深刻だったころ、日本人のおおくが、あたかも日本人は偏見をもたない人種であるかのように話しているのを私はしばしば耳にした。もちろん人種的偏見をまったく持たないという人間はおそらくないであろうが、日本人は、はたして他國の人種問題をとやかく批評できるほど人種的偏見のすくない国民なのであろうか。

相手が西欧人か東洋人かによって日本人の態度が変ることは、私自身がしばしば眼のあたりにしたことであった。南京の大虐殺や関東大震災における朝鮮人虐殺は、単に不幸な事故だったのであろうか。そして偏見の対象は国外だけにとどまらない。私は海外でおおく沖縄出身の人たちに会って、いわゆる内地人が沖縄の人たちに対してもっていた偏見を知った。しかもあの戦場と化した島々の人たちに対して、戦後、内地人は酬ゆるところがあったのであろうか。

横文字のネオンが夜景を色とり、シャンソンの調べがデパートの店内に流れる東京は、外見ではまったくの国際都市となった。だがその東京で、知人の子どもは、アメリカ人だという理由だけで投石され、後頭部に烈傷を負った。私自身の子どもは、混血であるがために、やはり投石された。「外人だ。」「外人だから悪いんだ。」「おばけだ。」「アメリカ人は帰れ。」こういった言葉は、国際都市と自称する大都会で耳にすべきものであろうか。しかも問題は、そばに親や先生がいることである。幼児からの英語教育は、いったい何のためか、私は疑問に思う。

日本は今や世界有数の経済大国となり、日本人は文字通り七つの海に進出した。「国際人」としての行動と責任が云々されるのも当然であろう。だが、私は、「国際人」になることを考えるよりも、日本人はここらで自ら

(p. 38 へづづく)



# 人類愛をもってこそ

山 口 英 雄

科学の発達とともに交通手段の発達は、地球上のどこにでも短時間のうちに私達を運んでくれ、異国の地にほうり出してくれる。また通信手段の発達は、地球上のできごとをテレビ、ラジオ、新聞等のマスコミを通して、すぐに私たちに伝えてくれる。好むと好まざるとにかかわらず情報の氾濫の中に埋没し、そこから自分に都合のよいものを選択しているのが現状ではなかろうか。

日本は、明治時代より、西洋に追いつかんがために西欧から諸制度を借入し、わがものとしてきた。学校においては西洋のことがらについて多く学ばされた。それ故日本人にとって、西洋は行ってみたいところ、足跡を印してみたいところであることは、偽らざる心境ではなかろうか。統計によれば、1年間に日本を離れる日本人の数は250万人前後になるという。このうち大部分の人たちは、短期間の観光旅行と思われる。一体何を見たり聞いたりしているのだろうか。イタリアの都ローマは世界屈指の観光地である。ここを訪れる日本人は年間20万人以上に達する。ほとんどが観光客であり、わずかに、会社、工場、学校訪問があるくらいである。

滞在は3日前後になるのが圧倒的と思われる。観光客はローマの聖ピテロ大寺院、コロッセウムを見て感心する。説明などはどうでもよい。すぐに写真を撮り出す。自分自身が、確かにそこに行ったこと、そして見たことで満足するようだ。そこに内在する精神的なものを理解しようとはしない。物を見て、その物の価値が、大きさや豪華さだけによって判断されている。ローマにはやはり多くの西洋人が来る。彼らは実によくガイドの説明をきく。分からぬところはすぐに質問する。写真などどうでもよいのである。歴史的なもの、内面的なものを探り出そうとする。これはただ単に、私たちとの歴史的なベースが違うことに由来するのだろうか。そうではないと思う。外国人は日本に来ても、日本のことを理解しようとし、説明をよく聞くし、観察は怠らないと言われている。

日本人の団体の場合、しばしば自由時間をくれとい

う。何に使うかといえば買物にでかけるのである。自分の個性には関係なく、日本で名の知れている「高級品」を扱っているといわれる店に競って足を運ぶ。それ以外に時間の過しかたを知らないようである。ローマは1日で観光できるところではない。1日観光バスに乗ってまわっても大したことはない。自由時間に何故自分の足で歩き、見るべきところへ行かないのだろうか。トレヴィの泉にコインを投げこむことだけで満足しているのだろうか。これは若い人でも同じことである。

また日本からのテクニカル訪問もあるが、団体で行った場合、本当に意義のあるものだろうか。報告書作成のための単なる方便に過ぎないとと思われるふしもある。イタリア語という特殊性のため通訳を伴うので、通訳の良し悪しによってその成果は問われるのだが、どの程度まで内容を理解しているのだろうか。日本の向上のためにどこまで役立つのだろうか。ガイドから聞いたイタリア事情を、さも自分が理解したかのごとく、帰国後話すのだろうか。

日本人の好きな言葉に、「進んでいる」と「遅れている」があると思う。2つの国を比較した場合よくてくる言葉である。しかしこの進歩の概念は、何に基づいているのだろうか。立地条件、歴史的条件等、内的なものを考えているのだろうか。遺跡、特にポンペイの遺跡などを見て、進んでいたと思うことは誠にけっこうだと思う。しかし、現代社会を見た時に、何が比較の基準になるのだろうか。数年前、ある旅行者は、イタリアのテレビのチャンネル数の少ないこと、またカラー放送が行なわれていないことを知って、遅れていると言った（現在はカラー放送もあるしチャンネル数も多い）。一体何が遅れているのだろうか。国民が多くのものを必要としなければ良いと思うし、ましてや、進歩とか退歩とかいうことではないだろう。日本では、テレビに生活が振り回され、対話がなくなり、家庭が崩壊してきたという。俗悪番組が多く生まれ、得体の知れぬ視聴率を信仰している。テレビに追われた生活に、人間の眞の生の楽しみが

あるのだろうか。創造の喜びはなくなり、与えられたもので満足している。ここに文化の向上があるのだろうか。日本を進んでいると言えるであろうか。日本人の進歩の概念は、物質文化だけを見て、精神文化を見ようとしないところに存在するのではないだろうか。

日本人ほど、総体的にみて、世界の国々についてよく知っている民族はいないのではないだろうか。歴史、地理、文学、音楽等実によく知っている。イタリア人などと比較すると驚くほどである。イタリアが地中海に突き出た長靴形の国であることは、日本では小学生でも知っている。逆にイタリア人は大学生でも、日本に海があるかとたずねたり、中国のどの部分であるかを聞いたりする。日本人は色々なことを知識として集積しているが、一体実生活にはどれくらい役立っているのだろうか。ただ断片的な知識だけで、物ごとの本質を見極めることができるだろうか。ローマ帝国は巨大であったと感嘆する。しかしその原因を一般人は探ろうとしないではないか。ローマ帝国の遺跡を写真に撮るだけでよいのだろうか。

日本では、日本や日本人についての各種の本が注目を集め、なかにはベスト・セラーの一つになったりするものもある。それに輪をかけるがごとく、外国人の日本に関する著書もよく売れているという。こういう現象は日本にだけおこるのだろうか。そして、これらの本を読む日本人は一体何を考えているのだろうか。書かれている内容を充分吟味もせずに、さも自分の意見の如く、「日本人はこうだ」などと、他人に話したりするのではないだろうか。

日本人は他人の評判を大変気にする国民だと言えよう。これは日本という国についても言える。そして外国人の言ったことは神の言葉の如くありがたがって、いつまでも嬉しそうに使っている。例えば、一時、ハーマン・カーンの「21世紀は日本の世紀」がしばしば引用され、現在は「エコノミック・アニマル」という言葉が盛んに使われている。視察団がそれらを使って、そのような言葉を知らないイタリア人に、逆に教えたりしている面もうかがえるほどである。

更につけ加えるならば、言葉の障壁は何といっても巨大な壁となって前途を防げている。外国に暮している日本人も多数いるが、中には、国際人たるとして失敗している人もいるのではないだろうか。自分が日本人であることを忘れ、その國の人間になりきろうとしても、全く無理な話であって、日本人でもなく、その國の人にもなりきれない国籍不明の人間となってしまうのがおちで、どちらからも相手にされなくなってしまうであろ

う。

日本人は仲間意識、島国根性が非常に強いと言われる。最近では若い人を中心にこの傾向は少しずつ修正されつつあるが、逆に個人主義をはきちがえた全くの利己主義が、幅をきかせているように思われる。

以上の如く日本人をみると、日本人が国際人たりうることは非常に困難なように思えるが、不可能なことではないと思う。敵を知り己を知るがごとく、外国语、外国人についての勉強ばかりでなく、眞に日本人であることを自覚し、自國の文化、精神への造詣を深めることも必要であろう。外国人は日本人に会えば日本のことを探りたいと思うのである。彼らにとって日本は、今もって神祕の国である。その神祕のペールを取り去る役割をすることが必要なではなかろうか。自國のことを正しく知ってこそ、他国をも理解できるものである。

更に重要なことは宗教的情操である。眞に国際人たるためには、人間が人間としてのるべき姿を知ることである。それは人類愛である。人類愛を培うためには、絶対性を説く宗教心を持たねばならない。そこで初めて人間とは何であるかという大前提が解決されよう。そこには、白色、黒色、黄色人種の区別ではなく、人間としての正しい理解に基づいた、相互理解、相互援助が生まれ、心の絆はしっかりと結ばれていく。たとえ外国へ行ったことがなくとも、この人類愛に根ざした生活をしている者のみが、眞の国際人たる資格を有しているのではないだろうか。このような人々こそ、地球上のどこに行っても、最初は言葉で通じなくとも、わが同胞として受け入れられるものと確信する。

(ローマ大学哲学部在学)

---

(p. 5 よりつづき)

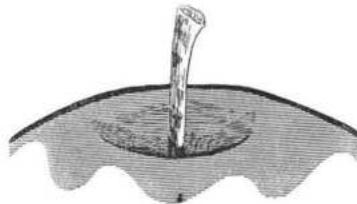
聞き手は相手の口から飛び出す一つ一つの音に絶えず耳を傾けているのではなく、正しく意味を伝えるのに必要な音声言語の3要素——個々の音、リズム、イントネーションのいずれか一つ、または、そのいくつかを組み合せたものの中にその手がかりを求め、相手のことばをより正しく理解しようとしていることがわかります。

従ってこの3つの分野における音法を「通じる英語」へのもう一つの基準として、今後の英語教育に取り入れて行くことが大切です。

こうした音声学の理論を、いかに実際の音声英語の修得または指導に取り入れ、応用していくかということが、今後の課題ではないでしょうか。

(早稲田大学専任講師)

# COMMUNITY LANGUAGE LEARNING AND COUNSELING-LEARNING



Since I have had first-hand experience practicing Swahili with Community Language Learning (CLL) models this year at the University of Michigan Language Institute and also experimenting with CLL in English Language Training Department (ELT) classes at Vancouver Community College's King Edward Campus, I think that CLL is very important for learning English as an additional language. We need the more wholistic and humanistic approach to language learning which CLL provides. As a viable alternative to handing out grammar exercises, putting students through the paces of structure drills and laying on situational topics devised primarily by the teacher, CLL emphasizes the importance of the learners and learning rather than the teacher and teaching.

Charles Curran of Loyola University, Chicago, developed CLL from his research in group dynamics because of his own problems and problems of others in second language learning. His premise is that we must consider the language learner as a whole person with feelings and soma (physical manifestations of emotional strain e.g., perspiring, shaking, quivering mouth) as well as intellect. Since most of our language teaching stresses cognition and behavioral objectives without considering the hidden emotional conflicts of anxiety, hostility and anger, we often face situations which appear irrational and even overwhelming as adults

Lillian Soga

*Instructor*

*Vancouver Community College*

struggle to learn a new language. Brought up in a society which emphasizes good manners, teachers are sometimes confused and incapable of coping with an adult's child-like behavior such as overt refusal to participate or silent refusal to answer.

However, according to Curran, these conflicts should be considered part of second language learning as a student moves back and forth through five stages:

- I. Embryo=learner completely dependent on knower.
- II. Self-Assertion=learner trying remembered words with help.
- III. Birth=learner trying to give entire simple and possibly imperfect structure without help.
- IV. Reversal=learner beginning to feel like a knower but still making mistakes.
- V. Independent=learner becoming fairly fluent but accepting suggestions on idioms and vocabulary.

In the learning process constructive anger is essential and aggression natural, especially as learners begin to assert themselves and move toward the birth stage and back and forth between stages to eventual independence. Therefore, a teacher should not feel intimidated or personally insulted by these expressions of conflict but instead allow the adult learner to express feelings in a counseling-learning situation at the time the problem is occurring or at a designated time

during or after the class period.

In a beginning class, learners are in the embryo stage and completely dependent; therefore, the teacher often dominates by preparing materials for the learners and then expecting them to accept what the teacher thinks they should learn. To prevent this from happening, CLL models allow four to six learners, sitting around a tape recorder, to develop a conversation topic of their own choice. The knower/counselor remains behind the group circle as each learner is encouraged to contribute to the free conversation using his native language. This is then changed into the target language by the knower, who gives the sentence or phrase to the learner in a soft, non-judgmental tone of voice, but loud enough for all to hear. The learner then repeats the target sentence on the tape recorder. In this way the topic of the conversation emerges from the learners along with various structures, while the knower becomes only a tool or resource without interjecting any personal ideas into the group or community. This conversational session lasts for about ten minutes at first but can be lengthened in later sessions as learners move from Stage I and become more assertive by trying words or parts of sentences without the knower's help. When the session with language which Stevick calls "investment" finishes (p. 126), the learners have a feedback period of reflection to react both objectively and subjectively to what they have contributed to the session and how they feel about the language experience. At this time negative as well as positive feelings due to previous experiences with the particular language, prejudices towards speakers of the target language, frustrations during the current learning situation, or pressures from outside the learning environment can be voiced. These conflicts in the traditional classroom are usually ignored and thus, unfortu-

nately, remain hidden.

In following class sessions grammatical structures from the taped conversation can be presented for oral and reading practice in printed form, on the overhead projector, or through chromacord exercises developed by Tranel (p. 157). Since La Forge also describes his experiments at the University of Michigan and in Japan in *Research Profiles with Community Language Learning*, I feel it is unnecessary to detail further explanations of CLL in this brief paper except to point out that Curran (1976) and Stevick (1976) also provide valuable theory and practical suggestions for teachers to use as a guide to CL/CLL.

Of course, now the big question is how can we adapt and use CLL in our own multicultural, multinational classes since the teachers do not have the multilingual expertise to know all of the first languages of their students. On the other hand, in any one ELT class at King Edward Campus we often find some range of difference in the oral ability of students from one native language background, so they tend to informally assist each other with vocabulary items. Therefore, it is possible for the more knowledgeable students to become counselors to those less knowledgeable on a more planned basis during the CLL conversational or investment session around the tape recorder.

In May 1976 at King Edward Campus in cooperation with Sharon Yoneda, I had a chance to experiment with an adult beginners level class during two twenty-minute sessions with CLL. My advanced students were taken to a class of twenty-two beginners who had had about four months of English in our program. They paired off by native language, and advanced students became the knower-counselors to the beginners who were put into five native language groups of four each and one group of two learners with one knower. Since this was

their first experience and there was much confusion with all learners participating, we did not record the sessions for later replay.

The groups were told to either practice a conversation which they had heard previously or have a conversation on some topic of their own. In most groups the learners and knowers introduced themselves first and then began practicing. Two groups were very enthusiastic and developed situations such as trying to buy a particular item because they had a practical need outside of class. The knowers provided vocabulary items or particularly difficult structures which the learners could not say. One group practiced familiar conversations to which they had been exposed previously in class but did not quite understand or were unable to produce. Another group had difficulty talking and needed a great deal of encouragement and reinforcement from the knowers and the two teacher/resource experts. The fifth group often got bogged down in asking for grammatical points and explanations rather than producing a conversation, so they constantly needed reminding of the purpose of the community language learning session. The diversified ways in which learners attempt to gain language proficiency could be identified quickly as well as problems certain learners had. Obviously, some felt they could not practice until they had had certain grammatical points clarified.

Unfortunately, we were unable to conduct a formal native language feedback-counseling session with the beginners because we teachers did not have ability in all the native languages. However, stopping the session was very difficult because most of the groups preferred to continue although it was almost the end of the class period when usually they are so tired and anxious to go home. Then, as the advanced class knowers were leaving, several beginners

asked when we would come to help them again, so I assumed that they felt CLL filled a need and created an important learning climate which was more stimulating than tiring.

The advanced class feedback-counseling session was carried out later in our own classroom. Two or three fast-learning students felt it was a waste of their precious learning time although they mentioned that some beginning students had indicated appreciation to them in their native language. Later, I thought it might be possible to record the feedback session in the native language and ask teachers who know the language to transcribe it.

Other slower advanced students realized they had picked up new vocabulary, become more aware of English syntax and consequently had a better understanding of basic grammar points which had never before become part of their own English language self.

The final unanimous opinion was that great benefit could be gained from CLL which creates a secure environment with a warm, friendly and understanding atmosphere so learners feel comfortable and unthreatened. As a matter of fact, many students wanted a group of more advanced knowers to come to our class to help them learn, using the same kind of CLL model.

During the second CLL session with the beginners, we used both classrooms in order to reduce noise and confusion. This time there was little hesitation in conversing as they quickly formed groups and participated enthusiastically in conversations. I firmly believe along with the proponents of CLL that the importance of unthreatening and non-judgmental language and reflection sessions must be seriously considered if we want the language to truly germinate, bud and flower into each learner's English language self.

Actually, in practice many teachers already encourage fast learners to assist slower ones in small group activities, thereby informally creating a community spirit and secure learning environment. (See other articles in this publication.) However, if we consider our philosophy of education to be that the learner is a unique individual with unique needs, we should begin to focus entirely on the learner and his/her learning rather than on our teaching, and allow the learner to produce, the class exercises to flow from that production, and the teaching to remain in the background and subjugated to learning.

Of course, there are still many problems arising from outside the classroom which can be a hindrance to community learning. For example, in our ELT Department, students, who attain a certain level of proficiency, progress every two months to the next class level, while others, not gaining the required language ability, remain. This often builds resentment because severed friendships, adjustments to new teachers, and reorganization and recreation of the class community disrupt learning. If, as many teachers have mentioned, two weeks or more are required for them to "get to know" the new class, think what loyalty conflicts, negative feelings and barriers to learning the students must have. Sometimes, certain students react with anti-social behavioral patterns in the new class or repeatedly ask to return to the old class and friends there.

At this point, the informal counseling session of C-L, which in effect is the teacher listening to student feelings and reactions, is necessary because if anxiety, hostility and anger persist, students might never advance from Stage III to Stage V in language development but instead remain frustrated and defeated by the system.

I can hear some teachers say now that we should be in class *only* to teach language

and not to worry about the feelings of a student, but at the same time these teachers will admit that their own feelings on a particular day influence how they teach. Surely then, learners' feelings affect how they learn!

In large classes using various methods and techniques, teachers find it difficult to give an equal amount of individualized attention to each student as a whole person with cognitive, affective and somatic domains. The tendency is to concentrate on the cognitive and teach as if each student were a vessel to pour English into without consideration for what the individual wants, why he or she came, and where she or he is at, academically and psychologically, in the five stages of learning.

There is a possibility that no learning or even negative learning may take place if teachers treat adults as children, with rewards and punishments, or neglect individual needs, feelings and aspirations. Malcolm Knowles, an adult educator well-known for his andragogical theories, says "Adults tend to resist learning under conditions that are incongruent with their self-concept as autonomous individuals." (1970, p. 40).

My recent experience with "Counseling" in an advanced ELT class, whose members were fairly fluent and therefore able and willing to express feelings in English, revealed that they, as learners, felt positively and negatively towards materials being studied. One student even mentioned his own feeling of "melancholy" was hindering his thinking ability on a particular day. The fact that he could share this feeling seemed to help lessen its grip, so he was then able to participate more fully in the class community. As the students became more comfortable and unthreatened in expressing how they felt toward what the class was doing, they became freer in sharing language frustrations faced outside the class-

room. Certain very quiet and seemingly shy students began to stay after class to talk individually about problems with English at work or to ask for extra help with certain points that were confusing in class. So if a teacher is open and non-defensive, the students will also become more open and free to express themselves.

With my present smaller class I am able to carry counselearning farther by designing individualized exercises to strengthen weak grammar areas found in their written and spoken English and afterward by having feedback-counseling sessions to see if the exercises were valuable and how we might use them more effectively for maximum learning. We also have many discussions arising from the weekly five to ten minute talk on a topic of an individual student's choice, which is announced to the class one or two days previously. That also gives me time to find appropriate reading and writing material related to the topic. After three weeks, students have begun to bring to class articles, essays and books which they had found either too difficult to read on their own or so full of interesting ideas that they wanted to share them. Since everyone has been contributing to the community learning, the class has become "ours" rather than "mine." My own material that I had prepared previously is extraneous and no longer useful.

La Forge believes that "the living experience of learning is at the heart of CLL activity" (p. 7) and goes a step farther to conclude:

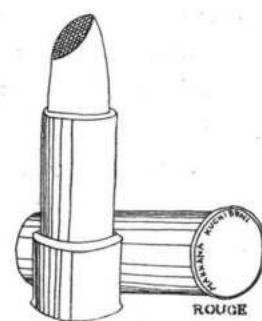
"If further research upholds the tentative conclusions . . . , then CLL will eventually cause a revolution in psychological research methodology (Experimental Psychology), and perhaps in the field of the Philosophy of Science." (p. 58)

Perhaps other teachers have used or experimented with CL/CLL and would like to

contact me and exchange practical ideas, problems and theories. At the Spring 1976 TEAL Annual Convention, a workshop on CLL was given, and hopefully we will continue to have more seminars and discussions on this important development in language learning. After all, Counseling-Learning, already used in other subject areas, is a whole-person philosophy for a life of learning.

## REFERENCES

- Curran, Charles. *Counseling-Learning: A Whole Person Model for Education*. New York: Grune & Stratton, 1972.  
\_\_\_\_\_. *Counseling-Learning in Second Languages*. Apple River, Ill.: Apple River Press, 1976.  
Dickinson, Gary. *Teaching Adults*. Toronto: New Press, 1973.  
Knowles, Malcolm. *The Adult Learner: A Neglected Species*. Houston, Texas: Gulf Publishing Co., 1973.  
\_\_\_\_\_. *The Modern Practice of Adult Education*. New York: Association Press, 1970.  
La Forge, Paul G. *Research Profiles with Community Language Learning*. Apple River, Ill.: Counseling-Learning Institutes, 1975.  
Lorge, Irving. *Psychology of Adults*. Chicago: Adult Education Assn., 1963.  
Stevick, Earl W. *Memory, Meaning & Method: Some Psychological Perspectives on Language Learning*. Rowley, Mass.: Newbury House Publishers, 1976.  
Tranel, Daniel D. "Teaching Latin with the Chromacord." *Classical Journal*, 63:4 Jan. 1968.





## バラッドの世界(その10)

—“Edward”をめぐって(承前)——

平野敬一

### Motherwell versionについて

前稿では主として“Edward”というバラッドのいわゆる Percy version (Child #13B)(以下略して Pv) を紹介し、これがチャイルド以下諸家の絶賛を受け、数々のバラッド集にもとりわけ多く収録されるヴァージョンであることを述べた。これに対して Child #13A にあたる Motherwell version (以下略して Mv) の方は、人気がなく、バラッド選集の編者たちからも無視されるのが通例である。B.H. ブロンソンなどは「およそ教育ある人で Percy version より Motherwell version の方を覚えるに値すると思ったものは、当のマザーウェル以外ひとりもいまい」<sup>1)</sup>と皮肉っている。ブロンソンはこの「教育ある」という形容詞に力点をおいているのである。

ところが、実際の伝承となると Pv は、とたんに影がうすくなり、Mv の流れを引くヴァージョンのみが目立つ。前稿では実際に伝承されているヴァージョンの例としてスコットランドの伝承歌手マッコールが歌ったジニー・ロバートソンのヴァージョン(全8連)を紹介したが、この Robertson version のもっと完全な形(全11連)がキンズリー編の『オックスフォード版バラッド集』(1969)に収録されていることをうっかりした。前稿に紹介したヴァージョンと違うところは、グレイハウンド犬をめぐる母子のやりとり(2連)が第3連のあとに入り、それと次の1連が第6連のあとに加わる、という点だけである。主人公が、弟を殺したので自分はこの地を立ち去らなければならぬと母に告げる場面である。

O I'm gaun awa' in a bottomless boat,  
In a bottomless boat, in a bottomless boat,  
For I'm gaun awa' in a bottomless boat,  
An' I'll never return again.<sup>2)</sup>

(大意：「ぼくは底なし舟に乗って2度と戻ってきません」。語注：gaun awa'=going away; An'=And) 底な

し舟で海へ出るのは、もちろん死(自決)を意味する。櫓のない舟に乗る、という形になっていることもあるが、バラッドでは舟で北の海へ乗り出すことは、ほとんど例外なく死出の旅を意味する。海はバラッドでは原則として豊饒や生命を象徴しないことは、すでに度々述べた(古英詩の「海へ乗り行く人」を参照)。

また Mv は、上述したように、バラッド選集の類に収録されることがほとんどなく、浩瀚(はん)なチャイルド本によらなければ参照の便がない上、本稿の論議を進めるのにも必要なので、多少いままでの引用と重複するところもあるが、かかげてみる<sup>3)</sup>。

- 1 'What bluid's that on thy coat lap,  
Son Davie, son Davie?  
What bluid's that on thy coat lap?  
And the truth come tell to me.'
- 2 'It is the bluid of my great hawk,  
Mother lady, mother lady:  
It is the bluid of my great hawk,  
And the truth I have told to thee.'
- 3 'Hawk's bluid was neer sae red,  
Son Davie, son Davie:  
Hawk's bluid was neer sae red,  
And the truth come tell to me.'
- 4 'It is the bluid of my greyhound,  
Mother lady, mother lady:  
It is the bluid of my greyhound,  
And it wadna rin for me.'

1) Bertrand H. Bronson, "Edward, Edward, A Scottish Ballad," *Southern Folklore Quarterly*, vol. 4 (1940), no. 1, p. 3. この論文はいま Bronson, *The Ballad as Song* (1969) に収録されているはず。

2) James Kinsley (ed.), *The Oxford Book of Ballads*, p. 242.

3) Child, *The English & Scottish Popular Ballads*, vol. 1, p. 169 から。出典は William Motherwell の *Minstrelsy, Ancient & Modern* (1827) となっている。

- 5 'Hound's bluid was neer sae red,  
Son Davie, son Davie:  
Hound's bluid was neer sae red,  
And the truth come tell to me.'
- 6 'It is the bluid o my brither John,  
Mother lady, mother lady:  
It is the bluid o my brither John  
And the truth I have told to thee.'
- 7 'What about did the plea begin,  
Son Davie, son Davie?'  
'It began about the cutting of a willow wand  
That would never been a tree.'
- 8 'What death dost thou desire to die,  
Son Davie, son Davie?  
What death dost thou desire to die?  
And the truth come tell to me.'
- 9 'I'll set my foot in a bottomless ship,  
Mother lady, mother lady:  
I'll set my foot in a bottomless ship,  
And ye'll never see mair o me.'
- 10 'What wilt thou leave to thy poor wife,  
Son Davie, son Davie?'  
'Grief and sorrow all her life,  
And she'll never see mair o me.'
- 11 'What wilt thou leave to thy old son,  
Son Davie, son Davie?'  
'I'll leave him the weary world to wander  
up and down,  
And he'll never get mair o me.'
- 12 'What wilt thou leave to thy mother dear,  
Son Davie, son Davie?'  
'A fire o coals to burn her, wi hearty cheer,  
And she'll never get mair o me.'

(大意：1. お前の上着のへりについている血はなんですか、息子のデーヴィよ。ほんとうのことを、さあ、いっておくれ。2. それはぼくの大鷹の血です、母上よ。うそではありません。3. 鷹の血はけっしてそんなに紅くありませんでしたよ、息子のデーヴィよ。ほんとうのことを、さあ、いっておくれ。4. それはぼくのグレイハウンドの血ですよ、母上よ。ぼくのために走ってくれなかつたのです。5. グレイハウンドの血がそんなに紅いはずはありません、息子のデーヴィよ。ほんとうのことを、さ

あ、いっておくれ。6. 弟のジョンの血なんです、母上よ。うそではありません。7. なんのことで争いが始まったの、息子のデーヴィよ。もう育ちそうもない柳の小枝を切ったことで始まったのですよ。8. お前はどういう死にかたを望むのかね、息子のデーヴィよ。ほんとうのことをいっておくれ。9. 底なし舟へ乗りこみます、母上よ、そしてもう2度とお目にかかりません。10. かわいそうな嫁になにを残すのかね、息子のデーヴィよ。死ぬまで歎きと悲しみを残してやりましょう。もう2度とぼくには会わないのだ。11. 長男になにを残すのかね、息子のデーヴィよ。うらぶれた世間をさまよえばいいのだ。ぼくからなにももらえないよ。12. いとしいお母さんになにを残す、息子のデーヴィよ。彼女を燃やす石炭の火を喜んでくれてやろう。もうこれ以上ぼくからもらえないよ。語注：build's=blood is; come 間投詞と解する；neer sae=never so; wadna rin=would not run; brither=brother; plea=quarrel, strife; wand=twigs; never been=never be; mair o=more of.)

この Motherwell version の文献初出は 1827 年になっているからバーシーの *Reliques of Ancient English Poetry* (1765) に顔を出す Pv より 60 年ほどあとの登場ということになる。文献の上では Mv の方が新しく Pv が古いのである。諸種のアンソロジーが Mv より Pv を採録する傾向にあるのは、Pv が文学作品としてすぐれているということのほかに Pv が Mv より文献的に古い、という点を買っているものと思われる。

前稿でも述べたように、Mv と Pv の主要な相違点は、Mv が Davie (David) を主役とする兄弟殺し (fratricide) の唄であるのに対して、Pv は Edward を主役とする父殺し (patricide) の唄であるということ。それに Mv が伝承の中に生きているのに対して Pv は研究者に愛好されながら伝承とは無縁らしい、という点である。もうひとつ、多少無理な解釈のように私には思われるが、両者の最終連の比較から、Pv では母親が犯罪に荷担しているのに対して Mv では荷担しているとはいえない、という見方がある。

Mv が英米で現実に伝承されているさまざまのヴァージョンと近いことは、それらのヴァージョンを検討してみるとすぐ判明することである。ただ、母親に対する憎しみを表明した Mv の最終連が伝承のどのヴァージョンにも見当たらない点が多少問題になりそうである。すべての伝承ヴァージョン（アメリカには特に多い）で母親は "Lord Randal" (Child #12A) の場合と同じく、ただおそろしい事件を息子に語らせりいわば話の引き出し役になっているだけである。なぜ伝承と無関係の Pv と同

じく Mv だけにこういう最終連がついているのだろうか。結論的にいえば、これはブロンソンなどの早くからの推定だが、Mv はこの点だけ先行した Pv の影響を受けたのではないかとみられるのである（“contamination by the Percy version”<sup>4)</sup> とブロンソンは表現する）。バーンーの有名な『古説拾遺集』(Reliques of Ancient English Poetry, 1765) は、それだけの影響を口承の世界に与えられるほど18世紀後半から19世紀にかけて広く一般に読まれていたのである。また、英語圏の外でも、特に北欧諸国に、このバラッドは広く流布しているが、どのヴァージョンにおいても犯罪の荷担者に母親になっていないという点からみて、この Mv の最終連は、本来の伝承ではなく、Pv からの影響を受けてあとから付け加われたものでなかろうか、という見方が強い。私も、いちおうこの説に従っておく。

とにかく Mv の最終連か Pv の最終連に比べると、いささか唐突の感を人に与える（これに対して Pv の方は最終連を目指して話が必然的に進行していく感じである）のは、そういう事情によろう。

### Percy version の問題点

前号でも触れたように Pv は技巧的に非の打ちどころがないほど作品としての完成度が高く、それだけにかえってほんものの伝承バラッドとみなすことはできない、という考え方方が強い。チャイルドは Pv を “one of the noblest and most sterling specimens of popular ballads” と絶賛し、わが岡倉由三郎もそれに全面的に賛意を表していることは、前稿でも、紹介した。しかし、はたして Pv が民衆バラッドとして「真正な」ものであるかどうか、意見は分かれている。The Ballad Book (1955) の編者リーチ (MacEdward Leach) のように Pv は「多少手が加わり、綴りも人為的に古めかしくされているかもしれないが、基本的には間違いなくほんもの (certainly genuine) である」とあくまでチャイルドの考えを踏襲する人もいるが、Pv は民衆〔伝承〕バラッドではなく文学バラッドであるという見方のほうがどうやら優勢で説得力があるよう見受けられる。早くも1912年に T.F. ヘンダーソンは Pv はすばらしい作品だが「民間伝承のミューズ (詩神) とのけがらわしい関係をもたなかった詩」であるといささか皮肉をこめて断定していたらしいが<sup>5)</sup>、この問題をとりあげていちばん説得的に Pv の伝承バラッドにあらざる所以<sup>(6)</sup>を論証したのは、おそらくブロンソン (1940) であろう。

ブロンソンは、伝承バラッドの韻律、措辞、発想法な

どを完全に自家薬籠中の物にして（ブロンソンの書くものを読むとそういう印象を受ける）、自分がとらえているバラッドの規矩（バラッドはこうあるべきだという）から Pv がいかに外れているかということを、あざやかに証明してみせる。ここで全面的にブロンソンの論考を解説するゆとりはないが、その一、二点を紹介してみると、たとえばバラッドにおけるリフレイン (refrain あるいは chorus) の問題がある。伝承バラッドのリフレインは、多くの場合、各連の 2 行と 4 行目にみられるものだが、もの語りの進行とほとんど無関係に、同じ形態を繰り返すのが常例である（「酷き母」[Child #20] におけるように）。それによってリフレインは、バラッドの語り手（歌い手）に適当に息を入れる余裕を与えるだけでなく、聴衆のバラッドへの参加（コーラスを唱和するという形での）を可能にするという重要な機能をはたすのである。ところが Pv をみると、そういうリフレインの機能に対する顧慮があるとは思われない。ほんらいの伝承バラッドなら、リフレインとして、この場合、たとえば ‘My dear son, now tell me O’ の単純な繰り返しが予期されるところを、Pv では第 1 連からリフレイン部にあたるところをみていくと、次のような順になっている<sup>6)</sup>。

- 1 And why sae sad gang ye, O?
- 2 My dear son, I tell thee, O.
- 3 Some ither dule ye dree, O.
- 4 My dear son, now tell me, O.
- 5 That were sae fair to see, O?
- 6 When ye gang ower the sea, O?
- 7 My dear son, now tell me, O.

わずかに第 7 連が第 2 連の繰り返しになっているだけで、あとは各連ごとに変化をもたせている。各連の最終行もリフレインとして同じ詩句の繰り返しが予期されるところだが、みごとなほど 1 回の反復もなく、各連ごとに変化していくのである。こういうふうに変化するリフレインは、他に例がないわけではないが、それは「自然」の伝承より「人為」の文学にその作品が近い場合に限られるようである。リフレインの変化は、詩の技法としては、同一詩句の単調な反復よりすぐれていることはいうまでもないが、ほんらい聴衆の参加の上に成り立つ伝承バラッドの本質にそぐわないものである。いたずらに聴衆を疎外させるだけだから。

またブロンソンによれば Pv の出だしの “Why does your brand sae drop wi’ blude” のような表現は、シェ

4) Bronson, *op. cit.*, p. 3.

5) *Ibid.*, p. 11.

6) 岡倉編 Old English Ballads (1923) による。

ークスピア劇にこそふさわしいものであって、伝承バラッドとまったく異質のものであるという。brand(剣)が文語であるのは論外として、“drop wi' bluid”というリアルな表現もバラッド本来のものでないという。さらに“Why sae sad gang ye, O”にしても、これは18世紀の文学的憂愁の投影であって、バラッド的でないという。そういわれてみると、いかにもその通りで、チャイルドや岡倉の「もっとも真正」(most sterling)などという絶賛は、対象が「伝承」バラッドであることを忘れた、読み手の「文学的」感銘から生まれてくるものだといわざるをえなくなる。若き日のバラッド学者ブロンソンは、すでに確実に身につけていた“good traditional ballad style”(ブロンソン自身の表現)に対する感覚を武器として、Pvの欠陥(伝承作品としての)をようしゃなく摘出する。いま読んでも小気味のいい論の進め方で、初発表後40年近くになるが、その有効性はすこしも失われていないように思われる。しかし、それと同時に私たちが忘れてならないのは、“Edward”的 Pv は、それが真正の伝承バラッドであろうがなかろうが、ひとつの作品としてもつみごとさと魅力を、いぜんとして減じていな、ということである。バラッド学者の M. ホジャートなどは、そのバラッド選集(*The Faber Book of Ballads*, 1965)に “Edward”的 Percy version を収録し、巻末ノートに “A literary version of a genuine traditional ballad”(イタリックス筆者)(真正の伝承バラッドの文学的ヴァージョン)と注し、チャイルドの主張する「真正」性とブロンソンが論証する「文学」性の両方をとり、うまく(するく?)逃げている。しかしあつてオーブリが発見した “Lyke-Wake Dirge” が現行のバラッド集からほとんど姿を消したように、この Pv もそのうち伝承バラッドの世界から追われる運命にあるのかもしれない。現在のたとえばキンズリー編の『オックスフォード版バラッド集』などは、いちおう Percy version と Robertson version の2本立てにして、いわば文学と伝承の両方の顔を立てているが、それは、現在のバラッド学に照らしていかにも過渡的な扱い方であり、次の改版では、Pvの方は消えるのではないか。個人的には残しておきたいが、そんな予感が私にはする。

### 殺人の動機の問題

かりに Pv が「真正の」伝承バラッドではなく、その昔バーシーに資料を提供したといわれるヘイルズ卿(Lord Hailes)とバーシー自身の合作にすぎないことが確定するなら、私たちはこの “Edward”<sup>7)</sup>という伝承バ

ラッドの主題の考察から Pv を外していく、いや外すべきである、ということになるかもしれない。しかし、この点について、私はもう少し結論を出すのを控えたい。とりあえずここで Robertson version をはじめ、現に英米で伝承されているさまざまのヴァージョンについて、その主題のことをもう一度考えてみたい。いったい、このバラッドの主題はなんだろう。あるいは兄弟殺しが主題だというのなら、その殺しの動機はなんだったのか。なぜ兄のデーヴィが弟のジョンを殺さなければならなかったのか。この点が、まだはっきりとしないということを、私は前稿の末尾で述べた。

はじめに掲げた Mv の第7連によれば、兄弟争い(plea)のきっかけとなったのは、柳の小枝(willow wand)を切ったとか切らなかったとかいう些細なことらしいが、殺人の動機としてそれはいかにも弱すぎるようと思われる。しかし試みに、このバラッドのさまざまの伝承ヴァージョンに明示されている(言及のないヴァージョンももちろんある)兄弟殺しの動機を調べてみると、ふしぎにそこに一貫したものがあることが分かる。すでに引用した Robertson version では、原因は “Because he wadnae rule by me”(ぼくのことをきこうとしなかったから)と他の馬や鷹を殺した(といつわった)ときと同じ理由を挙げているだけで、あまり参考にならないが、セシル・シャープが今世紀のはじめに採集したアメリカ・ア巴拉チア山地のヴァージョンの一つ<sup>8)</sup>では、動機は “... about a little bush/That soon would have made a tree”(やがて木になるはずだった小さな灌木をめぐって)とあり Mv とのつながりをおわせている。いま筆者の手許にあるいくつかのヴァージョンに示されている殺しの動機を順不同に列挙してみると、パディー・タニーの歌うアイルランド版<sup>9)</sup>では “the cuttin' of a wood/That would never come a tree”(けっして樹木にならない木の伐採), A. モーザーが歌うアメリカのノース・カロライナ版<sup>10)</sup>では “for cutting down a holly bush/Which might have made a tree”(木になったかもしれないヒイラギの茂みを切り倒したので), アメリカ国会

7) たとえ唄の中に Edward という名が登場しなくとも、このバラッドのいわば generic name として “Edward” が使われることが多い。本稿もその用法に従った。

8) E.K. Wells, *The Ballad Tree* (1950) より,

9) Paddy Tunney, *The Man of Songs* (米 Folk-Legacy Records, FSE-7) および *The Folk Songs of Britain*, vol. 4 (英 Topic Records, 12T160) に収録。

10) *North Carolina Mountain Folksongs and Ballads*, sung by Artus Moser (米 Folkways Records, FD 5331) より。

図書館の資料盤<sup>11)</sup>では“about cutting yon hazelnut tree”(向こうのハシバミの木の採伐をめぐって)、さらにアメリカ・オザーク山地の歌手 M. ハンターの唄<sup>12)</sup>では“(We) fell about a sycamore bush/That might have made a tree”(木になったかもしれないプラタナスの灌木のことで仲違いした)となっている。これにさらに手許の活字だけのヴァージョンを追加するなら、J.J. ナイルズ<sup>13)</sup>が1934年にノース・カロライナ州で採集したのは“Twas over a wand, and a withy-withy wand/That never would be a tree”(けっして樹木になりそうもなかつた柳の枝をめぐって)というふうになっており、リーチ編の *The Ballad Book* (1955) に収録されているミズーリー地方のヴァージョンでは“We fell about a sprout/That might have made a tree”(木になったかもしれない苗のことで争った)となっている。

以上の7つのヴァージョンを比べてみると、木の種類こそヒイラギ、ハシバミ、プラタナス、ヤナギなどと一定していないが、すべてに著しい共通点があるのに気がつく。つまり「そのままにしておけば大きな樹木に育ったはずの小技〔若木、茂み〕を損なう」(前半が否定になっている場合もあるが)という表現が一貫しているのが分かる。これだけ似たものが揃うと、これはもはや偶然の一一致というものではなく、この伝承バラッドの本質的な一部であろうと考えざるを得なくなる。

このふしげに共通している表現の意味がとうぜん問題になる。実は、この「小技を折る〔茂みをこわす〕」といるのは、採集者セシル・シャープのフィールド・ワークによれば、“little girl”(と通じる?)を意味するいわゆる婉曲代称法 (kenning) だという<sup>14)</sup>。これはコッフィンの論考の文字通りの受け売りだが、同じくこの論考を拠りどころにして、この表現はきょうだい間のインセストを含意するケニングであると説く学者<sup>15)</sup>もいる。

このあたりアメリカのバラッド研究者たちの結論の出し方に若干の飛躍があるようで、資料に乏しい私たちを充分なっとくさせるだけの論拠なりデータなりを提示しているとはいえない。したがって「枝を折る」という特異な表現からきょうだい間のインセストの含意が出てくる過程は、正直のところ、私にはよく分からない。ただこういうことはいえると思う。“Edward”と多分に共通点をもつ他のバラッド、たとえば“Lizzie Wan”(Child #51)などからの推定で、この解釈に根本的な誤りはなさそうである、ということ。つまり(このあたり他のバラッドを引用していくはいたずらに煩瑣になるので結論だけを示す)、“Edward”と“Lizzie Wan”と(それに Child #49の“The Twa Brothers”を加えてもいい)が

多分に共通点を有し、同じ根から出ていることは、まず間違いないといえる。これは文献がどうのという書誌的な理由からでなく、この2つのバラッドを読み比べたら、まずだれでも感知できることである。ただ“Lizzie Wan”的素朴な、いささか芸のないインセストの表現(妹が兄に向かって “There is a child between my two sides/Between you, dear billy, and I” [兄さんとわたしの間の子がわたしのおなかの中にいるのよ] といったりする)に対して“Edward”的もろもろのヴァージョンは「枝を折る」というような象徴的な表現にたよっているのである。

かりに“Edward”をインセストを主題にしたバラッドと解するなら、Mv の最終連は、やはり不要ということになる。人の道にもとるインセストの罪を犯した弟を殺したということに対して、母を憎んだりのろったりする必要は少しもないからである。もっとも、ヴァージョンによっては殺されたのは“brother-in-law”となっていることもある。その場合、この殺害事件への母親のかかわり方は、もう少し複雑なものになってくる (“The Twa Brothers”でその辺のいきさつがもっとはっきりしているヴァージョンもあるが、いまそれに触れない)。

とにかく表にあらわな形で出てこないきょうだい間のインセスト、もっと厳密にいうと(2人の)兄弟対(1人の)妹の近親相姦の三角関係 (incestuous triangle) が、この“Edward”というバラッドの底に潜んでいて、それが犯罪の真の動機を形成している、という解釈が結論として出てくるようである。紙数の都合で、ここまで推論や論証の過程を必要以上に省略したかもしれないが、このバラッドのいろいろのヴァージョンを読み比べ、聴き比べながら考えてみると、この解釈に異論をはさむ余地はあまりないように思われる。

11) *Child Ballads Traditional in the United States* (The Library of Congress, AAFSL57).

12) *Ozark Folksongs and Ballads* sung by Max Hunter (米 Folk-Legacy Records, FSA-11) に所収。この唄はここで子供の comic song になっている。

13) *The Ballad Book of John Jacob Niles* (1961), p.67より。唄のタイトルは“The Murdered Brother”となっている。

14) Tristram P. Coffin, “The Murder Motive in ‘Edward’,” *Western Folklore*, vol. 8 (1949), no. 4, pp. 314-319 を参照。

15) たとえばフロリダ大学の Twitchell 教授。同氏の “The Incest Theme and the Authenticity of the Percy Version of ‘Edward’,” *Western Folklore*, vol. 34 (1975), no. 1, pp. 32-35 を参照。

## Percy version の位置

さてこの後は蛇足のようなものだが、バラッド選集編者たちの寵兒(?)である Percy version という文学ヴァージョンは、もろもろの伝承ヴァージョンに対して、どういう位置を占めるのだろうか。Pv はバーシーその他の人によるたんなる合作(創作)であって、伝承とはまったく無関係(Mv の結末に影響を与えたらしいという点を除いて)な作品である、と一蹴してしまうことももちろん可能だが、前述のトウィッチャエル教授が試みに提示しているひとつの解釈<sup>16)</sup>がたいへんおもしろいように思われる所以紹介してみたい。前稿でも述べたように Pv の最終連で母親と息子 Edward の交わす問答には、どこかただならぬものがただよっている。母親が“What will you leave to your ain mither dear?”(イタリックス筆者)という言い方の情の深さ、またそれに対する息子の答え“The curse of hell frae me shall ye bear”(イタリックス筆者)の2人称の使い方にみられる憤りの激しさ(バラッドではこういう場合、問い合わせもともに3人称で淡々と通すのが常套)の中に、母子間のただならぬ(つまりインセスト的な)関係を読みとったのはトウィッチャエルだった。母親と息子の間にそういう異常のつながりがあったからこそ息子は父親を、母親の暗々の意向を受けて、刃(?)にかけようになったのである。そして、そこまで自分を追いこんだ母との関係に対して、地獄ののろいを、と絶叫せざるをえなくなったのだ。まことに岡倉でないが「惨また惨」まさに人間の地獄絵図をかいしまるる思いがする。

ここでトウィッチャエルはこう解釈する。現在伝承されているもろもろのヴァージョンから、あらわな形でのインセストの表現が姿を消し、その代りに「枝を折る」式のケニングが登場するようになったのは、インセストに対する人間社会の禁忌(タブー)が強烈に作用していたからであろう。これは童謡の伝承にもみられることだが、社会通念(さまざまの禁忌を含めた)は、なんらかの形で伝承に影響を及ぼさずにおかないものである。たてまえの社会でインセストが認められなくなると伝承の世界の表現からもインセストへのあらわな言及は漸次消えていかざるをえなくなる。この場合、バラッドで問題になるのは、きょうだい間インセスト(sibling incest)であって、親子間インセストではない。Pv を唯一の例外としてバラッドには親子間のインセストは登場しないからである。これは、しかし伝承の世界で親子インセストがきょうだいインセストより弱かったということにはな

るまい。むしろバラッドに親子のインセストが登場しないのは、あらわに言及するには禁忌があまりに強すぎたからではないか。ある古い時期(これはまったくの想定であるが)に親子間インセストもきょうだい間インセストも伝承の世界のテーマとして大っぴらに存在していたに違いない。しかしこの2つのうちでは親子間インセストに対する忌避の方が問題にならないほど強く、伝承のどこかの段階できょうだい間インセストに変容して席をゆずらざるをえなくなったのではないか。親子間のインセストが民衆の忌避によってきょうだい間のインセストに「昇華」させられた、と考えられないだろうか。つまり、現在の「枝を折る」式の婉曲代称法が登場する前に、もっとあらわな形でのきょうだい間インセスト(の表現)があり、その前にさらに親子間インセストが、題材としても、表現としても、存在していたのではないか、ということなのである。

結論的にいえば、親子間のインセストをかろうじて残している(それも解釈のしかたによるが)“Edward”的 Percy version は、現在伝承されているさまざまのヴァージョンよりは、ずっと古いいわば祖型バラッド(Ur-ballad あるいは proto-ballad)に属するものではないか。バラッド伝承の世界からとっくに消え去ってしまった往昔の親子インセストの伝承の、最後の痕跡ではないか。

トウィッチャエル教授は、こういうふうに想像(ここまでくるともはや「推定」ではない)をめぐらせている。この想像は、おそらくは見込み違いということになるだろうが、Percy version ひいてはバラッド伝承史に対するひとつの魅力的な刺激的なとらえ方であることは否めないように思われる。

(東京大学教授)

16) Twitchell, *op. cit.*, p. 35.



# ハワイ研修報告記

橋 内 武

この夏ホノルルのハワイ大学と東西センターは“Japanese invasion”に見舞われた。百数十人の日本人（学生・教員・研究者）が、LSA Linguistic Institute（米国言語学会主催の夏期講座）に押しかけたからである。このうち JACET の一団（47名）は、著しく目立った存在であった。参加者はみな日本の大学の英語（または日本語）の教員であり、Linguistic Institute に出席しながら、別に独自のプログラムを東西センターに繰り広げたからである。——本稿は、7月11日から8月20日にかけて併行して行われたこのハワイ研修について、報告することとしよう。なお、プログラムが豊富であったこともあり、Linguistic Institute の方に多くの枚数を裂くことになると思う。この点予めお断りしておきたい。

Linguistic Institute は、筆者にとって1969年（イリノイ大学）、1973年（ミシガン大学）に次ぐ参加であった。69年には解釈意味論者と生成意味論者の激しい議論の応酬を見、73年には社会派言語学の急速な台頭を見たのである。それが、今年（1977年）はどうだったか。そこに見たのは、言語学の多様化であり混乱であった。ここで「多様化」と私がいうのは、狭義の言語学の外に成立した語用論、談話分析、社会言語学、心理言語学、神経言語学という諸分野のいわば遠心的発達であり、「混乱」とは、狭義の言語学自身の内部で起っているパラダイムの分裂である。標準理論→拡大標準理論→痕跡理論という流れとは別に、生成意味論、格文法、非分離文法、関係文法、機能的構文論といった諸理論が次々と現われたが、そのいくつかはすでに消えていった。言語学を外から眺める者には勿論のこと、この学界の中で仕事をする者にとっても、とても全体像はつかみえないものとなってきた。言語学は、今日目標を失った怪物である。安心して寄りかかるモデルがあるわけではなく、そ

うかといって自分でこれぞと定めた分野について位置付けをしたり、方向を見定めたりすることすらもでき難い状態である。伝統的に言語学の核心部は音韻論と統辞論にあった。しかし、目下研究活動の勢いは、新興分野の hyphenated linguistics に移っているようだ。neuro-linguistics しかり socio-linguistics しかりである。そして、今年の Linguistic Institute には「言語問題の言語学」というべき language planning が大手を振って登場したことを報告しなければなるまい。

ところで、ハワイ大学での Linguistic Institute についてどう評価すべきだろうか。70数人の教授陣を配し、80有余のコースを開講し、visiting scholars を含めて1,000人を越す参加者を得たということは、規模も大きく、興業としても大成功の講習会であったといえよう。

コースの中味は、次の5つに分類することができる。

- (1) 言語学プロバー
- (2) 神経・心理言語学
- (3) 社会言語学と言語問題
- (4) 東アジアと太平洋の諸言語
- (5) 外国語教育

以上、5つの分野のうち、(1)と(2)については説明を省略させていただき、(3)と(4)と(5)についてのみ述べることにしよう。

(3)は東西センターの力添えで成立したものであり、大層大がかりなプログラムが組まれていた。星間の開講科目の他に、晩の講演会が毎週2度（月・火）開かれたのである。

英語で“language planning”と呼ぶこの新領域にどういう訳語を与えているのか、筆者は知らない。言語政策論も言語改革論もふさわしくない。そうかといって、字義通り言語計画としても都市計画や経済計画とのパラレリズムが成立しないから、うまくない。J. ネウストブニー（1976）に従って、これを第4の社会言語学、すなわち「言語問題の言語学」とすれば、まさに直截簡明に言い当てたことになろう。

このような“language planning”という領域が、日本の外国語教育にどのような問い合わせ新たに提起するか、思いつくまま次に書いてみたい。

- A. 外国語教育政策の成立に日本人の民族性やわが国のナショナリズムがどういう役割を演じてきたか。
- B. 学習の模範となる英語が世界史の流れの中でどう変ってきたか、またこれからモデルとすべき英語とはどんな種類のものであろうか。
- C. 日本の大学の英語科、英文科、英語教員養成課程は、英米のそれらとは異なり、どういうカリキュラムを

編成するのがふさわしいのだろうか。

- D. それぞれの教育段階で、様々な外国語（といっても大方は英語だが）を学べる機会を国家としてどの程度用意すべきだろうか。——英語に比べて、朝鮮語が外国語科目に登場する率が著しく低いのは、一考を要しないか。
- E. 専門用語（とくに科学技術用語）の訳語を、異なる分野の間で調整するわけにはいかないものだろうか。
- F. 海外帰国子女のかかえる様々な問題を知るために、バイリンガル・システムの学校が全国にいくつか作られないものだろうか。
- G. 外国語教育に従事する「外人教師」の役割やその資格基準は何だろうか。
- H. 日本英語教育改善懇談会が発足して5年になる。私はこの改善懇の発展を祈るものであるが、それと一緒に次のような問い合わせを抑えておけないのである。「日本の英語教育を考える前に、日本の外国語教育を考える会がなぜ成立しないのだろうか」と、外国語イコール英語なのではなく、英語は数ある外国語の一つであるという当然の認識がもっと育つべきであるし、独仏西露中などの語学教師との連携が必須である、と思われてならない。

次に(4)の東アジアと太平洋の諸言語について、個別言語のプログラムに日本語と中国語と朝鮮語にオーストラネシア諸語が取り上げられたのは、ハワイ大学の性格を物語っている。とりわけ、日本語関係は豊富で、12の科目が開講され、シンポジウムが週末に次々と4つ開かれた。このことは、日本語学史上特記すべき事柄だろう。

- A. Symposium on Problems in Japanese Syntax and Semantics (July 21-23)
- B. Symposium on Japanese Sociolinguistics (July 28-30)
- C. Symposium on the Teaching of Japanese (August 4-6)
- D. Symposium on the Historical Relationships of Japanese and Korean (August 4-6)

このうち、Aで発表された論文は東京の開拓社から近く出版される予定であるし、BとCについてはAntonio, Texas の Trinity University から刊行される運びとなっている。Dの出版計画については、明らかではない。

おそらく本誌の読者が一番関心をもっているであろう(5)の外国語教育については、めぼしい講義題目と講師名を4つ挙げ、傾向をつかんでもらうこととしよう。

English as an International Auxiliary Language—Mark Lester and Larry Smith  
Sociology of Bilingual Education—Joshua Fishman

Unconventional Approaches to the Learning and Teaching of Foreign Languages—Earl Stevick

Drama and ESL—Richard Via

筆者はこのすべてに出席したわけではないが、次のこと気に付いた。

- A. 第三世界の英語を含めた英語のさまざまな変種を學習の対象としようという動きがあること。
- B. バイリンガル教育の発展は、文化的多元主義や民族的アイデンティティーの模索と関連しているということ。
- C. A. Maslow や E. Berne といった人たちのヒューマニスティックな心理学が、外国語教授法に影響を与えてきているということ。
- D. 外国語教育に対して実際的・経験的アプローチをとること、英語教育論争が観念論に終始しがちなど何かの国とは違うわい、と思われた。

LSA Linguistic Institute についてはこのぐらいにして、JACET が別個に設けた独自のプログラムについて報告しておこう。JACET は、原則として火曜の晩に会合をもった。テーマ別のシンポジウムと特別講師を招いてのセミナーである。そのプログラムは、以下の通りである。

シンポジウム I 「日本の英語教育」(7月19日)

司会：五十嵐康男

講師：後藤哲也、安田一郎、伊藤嘉一、小田朗美

シンポジウム II 「言語学と英語教育」(7月26日)

司会：寛寿雄

講師：沢田治美、松田徳一郎、中村純作、山本進

シンポジウム III 「心理言語学・社会言語学と英語教育」(8月2日)

司会：福本一

講師：土屋澄男、橋内武、藤田剛正

シンポジウム IV 「JACET ハワイセミナーに参加して日本の英語教育を考える」(8月16日)

司会：佐藤秀志

講師：井上亮治、岩城礼三、中村浩路

セミナー I 久野暉教授を迎えて(7月12日)

セミナー II Prof. Karl Diller を迎えて(7月15日)

セミナー III Prof. James McCawley を迎えて(8月9日)

(p. 43 へつづく)

# ミシガン州立大学英語研修

ランシング市長と  
研修生たち



## Errand に出されて

坂 範子

ミシガン州立大学での英語研修は、教室での授業に様々なプログラムが繰り込まれ、内容豊かなものでした。Home Visit も Home Stay も County Fair も、それぞれにアメリカを知りアメリカ人に接する楽しい企画でした。短い期間に色々の体験のできる私達の旅に、アメリカの人々が羨みの声を発するのを何度も耳にしました。そんな旅のすべてを語れないのが残念ですが、どう鍛えられ、何を学んだか、ある例を振りかえってみましょう。

大学の初日の試験によって、2日目の朝クラス分けが行なわれ、いよいよ授業が始まったその日でした。今村先生の授業の後で突然私達は Errand に出されることになったのです。先ず各クラスから1・2名で、グループが作られました。そして各グループの行き先が手際よく次々と告げられ、メモが渡されました。動物園へ、州庁舎へ、美術館へ、鉄道の駅へ……。

私達のグループは4人でした。受取ったメモには、前半こう書いてあったのです。

You have an appointment at 2.00p.m. to visit the Eastminster Day Care Center at 1315 Abbott. A woman will show you the place and tell you a little about American child care. Don't be afraid to ask her ques-

tions, because she likes to answer them. Prepare yourself to tell your classmates about the center and about child care in the U.S. Is anything different from Japan? Is anything the same?

この後に、道中の案内として、バスの乗り方と乗り換え地点の説明がついていました。とにかく目的地は保育所です。はたしてどんな所でしょうか。会って下さる女性はどんな方でしょうか。うまく約束の時間までに、バスを乗り継いで行き着けるでしょうか。授業初日のこの課題に、私達はすっかり度胆をぬかれたのです。5200エーカーもある大学のキャンパスの中も、いや6階建ての大きなホールの中さえ迷わずに歩くのがまだ難しいというのに、西も東もわからないイースト・ランシングの町中へ放り出されることになったのですから。私達のざわめきを、にこやかに見ている先生方が、その時は千尋の谷へ子を突き落すというあの親ライオンに見えたのです。外はあいにくの雨っていました。

アメリカではバス停に名前がないことを学ぶ：そういうことを何かで読んだことがあるようにも思いますが、実際にそんな場に放り込まれると、これはかなり不安なことでした。目的地が近づくと、お客様はバスの左右に1本ずつ通してあるロープを引いて運転手に合図を送り、降ろしてもらうわけです。「次は○○」という車内放送ではなく、運転手も何も言いません。昼過ぎの空いたバスは、合図がなく、バス停に立っている人がいな

ければ、どんどん走り続けます。私達は前乗りの入口から入るやいなや、運転手に行き先と住所を告げて、降りるべき所へ来たら知らせて欲しいと、ただし丁寧に頼むしかありませんでした。

生の英語はとんでもないものであることを学ぶ：途中のちょっとした幸運もあって、めざすセンターの教会へは、それでも約束の時間にゆとりをもって着きました。そして、いよいよ園長先生の会見が始まりました。40年配の方でした。彼女は私達の眼をかわるがわるに見つめて、話始められました。同時に私達の必死の戦いが始まったのです。まさに、戦い——英語についていく戦い——でした。ともかく速いのです。立て板に水とは、かくやと思う速さです。大学の教室の英語とは違うのです。少しは聴き慣れているVOA放送の何倍の速さでしたでしょう。ぽつぽつ聞き取った言葉をつなぎついで、アメリカの母親が働きに出る現状とか、こういう施設は州の認可制であるとか、預かる子供の年齢とかについて、大きなメモ用紙に書きとめたことは僅かでした。前もって準備した質問も、答は半分も聞きとれない有様です。4人ともすっかり動転していたのでしょう。後になつて“more slowly”と頼むゆとりも気転もなかったと、笑い合つたのでした。

コミュニケーションは言葉だけではないことを学ぶ：大学へのもどり道、行き先のちがうバスに乗り込み、運転手に大声でわめかれて、すごすご降りたのですが、あの時彼が英語で何と言ったのか、今もってわかりません。英語を聞くことは難しいと、覚悟はしていたのですが、そんな生易しいものではなかったのです。それでもこの日私達は学校訪問の折の要覧よろしく、センターの案内書や願書などの資料をもらうことを忘れませんでしたし、夕食の時間までに寮へ帰り着くこともできました。後日教室で、他の人達に立派に(?)報告もできました。結局このエランドを通じて私達は英語を学ぶとともに、この日の朝受けたばかりの今村先生の講義の意味を身をもって理解したのです。即ち「コミュニケーションは言葉だけによるのではない。LanguageとMindとNon-Language(Face, Body, Atmosphere)の3つで、私達は話を通じ合わせるのです」と。

(石川県立金沢錦丘高校教諭)

## ミシガン州立大学に学んで

小森忠

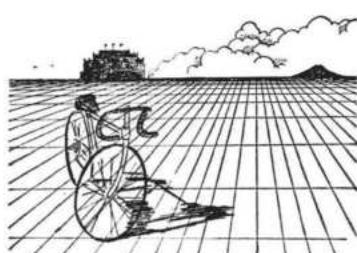
これは生まれつきなどと、今でももうあきらめているけれど、私はどうも自分をとりまく環境に逆らってもという意志が弱い。そこで今年の夏は思い切って、英語を使わなければどうにもならないという環境に、自分自身の体を置くことにした。だからELECの英語研修旅行に参加することは、私にとっていわば私自身に対するひとつの実験であった。

ミシガン州立大学は、アメリカの大学の中でも有数の広いキャンパスを持ち、赤いレンガづくりの6階建物は緑の芝生と美しく調和し、落ち着いた雰囲気も私たちにとってありがたいことであった。私たちのために開放された寮も食堂も快適で、勉強の手伝いをしてくれたスタッフも親切であり、大学での3週間は実際に恵まれ、申し分なかった。

約1か月の滞米生活で最も印象深かったのは、2泊3日のホームステイであった。ステイに出発する前は、だれも不安を持っていましたが、帰ってきてからの感想発表会では、自信と喜びで満ちた感想が大部分であった。アメリカの家庭生活に触れながら、全く未知の人間どうしが互いに理解し合っていく過程を体験することができた。ことばが不自由であればある程、互いに相手を理解しようとする心が高まり、とぎれとぎれのことばの中に人間の美しい心を盛り込むことができる。そして、3日目の午後には、別れ難い感情が全身をおそつくるのだった。

それは、同じ日本人どうしが日本語を使いながら、なおかつ理解できない現実や、空虚なことばだけがあふれている現在の日本の状況に慣らされてきた私にとって、実に得難い体験となつた。これだけでも、夏休みをアメリカで過した価値は充分あったと、私は思っている。

(長野市立裾花中学校教諭)



# オックスフォード大学英語研修



チームズの  
パンティング

## スコットランドの5日間

安藤香人

オックスフォード大学で2週間の研修を終え、霧雨けむる街をあとにスコットランドへ旅立つ。大型貸切バスに一行11名は2人分の席を1人占めしてもまだ空席が残る。ゆったりとした気分で窓外を眺めることができる。高い山ではなく、広々とした田園風景と、草をはむ羊や牛の群れを目にする時、日本では失なわれつつある自然が英国にはまだ残っていると思う。

国立公園の湖水地方に近づくと、さすがに風景は変化に富み、緑の木々と青い湖が印象的である。それほど気温は高くないが、水着姿の人々をみかける。英國はいまが夏の盛りなのである。バスの中はクーラーはないが、それほど暑くない。

湖水地方をあとにすると、山は一段と険しくなり、スコットランドへ入ったことをうかがわせる。山々には木がなく、草原のようで全山ヒースの花が所せましと咲いている。約12時間のバスの旅でスコットランドの都、エジンバラに到着したのは夜8時過ぎていた。夕陽はまだ西の空に残っていた。

翌8月7日朝、ホテルの前の川に架っているすばらしい眺めの橋をみていると、下関の関門橋を思いだす。現地ガイドのウイリアムズ夫人の案内でエジンバラ市内、エジンバラ城、ホーリールード宮殿等を見学する。ウイリアムズ夫人はやさしく親切で、わかりやすい英語で説明してくれた。日本のマウント・ウスが爆発したという

ニュースも彼女から聞いた。エジンバラは重厚な街である。

午後から半日をかけて、さらに北の街、インバネスまでバスの旅をする。オックスフォードでも、ロンドンでも、エジンバラでもよく日本人観光客の姿をみかけたが、さすがにここまで来ると、日本人をみかけることがない。

でっぷりとふとった学者肌のラクラン・ショウというガイドの案内で、スコットランド軍とイングランド軍が激しい戦いをした古戦場をみる。つわものどもの夢の跡、今はひっそりとして、朝のやわらかな陽光が足元の草露を照らしている。タータンキルトの製造工場を見学した後、神秘の湖ネス湖へ向う。旅行中、もっとも興味深い観光地の一つであったが、年に数えるほどしかないという上天気に恵まれ、湖水をモーター・ボートが走っているのどかな風景に接すると、とても怪物ネッシーがいるとは考えられない。ガイドのショウ氏はネッシーは絶対にいると信じていたし、拾数年間もこの湖畔に住みつきネッシーの写真撮影に生命をかけている50がらみの男の話を聞いたり、対岸のウルクハートの廃城を目にする時、やはりここには現代人が失いがちな、ロマンの漂うなにかがあると感じた。

夕食後、スコットランドの民俗舞踊を屋外で楽しんだが、こんな時、文明に毒されていない英國最果ての街の良さをつくづく感じた。

途中、ニューカッスルで1泊してロンドンに帰ったわけであるが、ふりかえってみると実にぜいたくな旅であったと思う。5日間のバスの運転手も非常に親切な男だ

った。いま強く願うことは、スコットランドの荒涼とした大自然はいつまでも残しておきたいということである。

(大垣女子高校教諭)

## オックスフォード大学に学ぶ

串原国穂

我々一行11人（高校教員6名、中学校教員4名、それに私）がモスクワ経由でロンドンに入り、バスでオックスフォード大学に到着したのは夜の9時過ぎ、夜といつても夕暮時であった。所長の Brian Downie 先生が出迎えてくれた。夕食後、部屋割の発表があり、3人は外国人と同室であることが知らされた。ルームメイトは日本人だと思い込んでいたのにいささかびっくりした。戸惑っているのを察知したのか Brian（研修期間中はすべての先生を first name で呼ぶ）は「何か具合が悪いこともあるのか？」と尋ねてきた。「何事も経験ですから」とすなおに同意してくれた3人の先生方に私は感謝した。

翌朝、ペーパーテストと面接があり、能力別に14名ずつ6つのクラスに分けられた。イタリア、フランス、ベルギー、オーストリア、ブルガリア、ギリシアなどの国から来た若者と一緒に勉強することになった。東洋からは日本人だけであった。

午前中は英会話の90分授業が2コマあり、その間に coffee break が30分とってあった。授業の内容はクラスレベルによって若干の違いはあったようだが、ねらうところは communication competence の向上にあり、situation に適したことばを automatically に発話させる訓練に終始していたように思う。授業を受けて特に感じたことは、日本人には共通した弱点があるということ。特に hearing が弱い。キレイな発音であれば聞きとれるが、ヨーロッパ人のくずれた英語は皆目わからない。英語については日本人は温室育ちである。

教室での教師の役割は animator であり、reinforcement の仕事が主であった。特にどういう教授法であるとは言ってなかったが、最近アメリカで話題になっている Community Language Learning のやり方によく似ているように思った。

授業でねらっている communicative competence の向上の思想は、午後から夜にかけての盛り沢山な social activities にも一貫して流れていた。2日目の夜、10人ずつのグループで pub を数軒案内してくれたプログラム

があったが、これなどにはその思想がもっともよく現われていたように思う。アルコールが入るとよく話せるようになるものだ。面白いことに、初日に配られた Information Sheet の中には16軒もの pub の紹介が出ていた。おかげで、それから毎晩いろんな pub を訪れる結果になった。よく行ったのは、13世紀にできたという Bear Inn (この店には名士のサインが壁中いたるところにはってあった)、それから食事の豊富な The Turf Tavern などであった。こちらの pub はすべて11時30分には正確に閉店になるので実に規則正しい生活を送ることが出来た。大ジョッキ1杯のビールがわずか150円で飲めるのも魅力的である。数百年を経た大木の並木通りを闊歩して帰る気分はまさに爽快である。東洋から来た異邦人が伝統あるオックスフォードの街のじしまに靴音をたてて歩くということ、平和であることの喜びをしみじみ味わう。

午後の Activities の中にはチャーチルの生家である Blenheim Palace, Stratford-on-Avon のシェークスピアの家、ロンドンなどへのバスによる excursion もあった。スポーツでは、クリケット、バレー、フットボール、ピンポン、サイクリング、パンティングなどがあったが、中でも cricket と punting (2m以上もある金属製パイプでボートをこぐもの) は初めての経験であった。イギリスでもこの punting があるのはオックスフォードとケンブリッジだけであるということだった。クリケットは想像以上にイギリスでは盛んで、三、四才の子供の頃からやっており、テレビでは実況放送が毎日のようにあり、新聞のスポーツ欄は半分以上がクリケットである。人気度では日本の野球に匹敵するようだった。ある人は “Cricket is England.” と言っているぐらいである。

また、見学するコースとしては、博物館、美術館、小・中学校、青空市場、裁判所など様々なものが用意されていた。

夜は、歴史、文学、政治などに関する Lectures のほかに、モームの “The Secret Flame”, シェークスピアの “The Merry Wives of Windsor” の芝居を見るプログラムも用意されていた。

日本における研修会は、一般に「教える一習う」という型の室内研修であるが、オックスフォードでは「遊ぶ一学ぶ」という型の野外研修であるということができるようだ。

(ELEC 出版部長)

# サンフランシスコ家庭滞在

ディズニーランド



## 私の Homestay

榎 原 百百合代

7月26日 Tue.

あと10分…5分…3分…15時15分。いよいよ搭乗だ。昨日、オリンピックセンターでのオリエンテーションで知り合った中村好江さんと機内へ。「23J」San Franciscoまでの私の座席番号。初めての飛行機に心はウキウキ。父母の見送る羽田空港をあとにして飛行機は澄みきった青空、モクモクとした白い雲の上を飛ぶ。…何時間眠つただろうか。朝がきた。また26日だ。いつの間にか日付変更線を通過していた。

霧に包まれた San Francisco の山々が見えだした。夢今まで見たアメリカへ私はやって来たのだ。空港に降りて、アメリカの空気を胸いっぱいに吸い込んだ。さあ、Host family の待つ Terra Linda へ Go!!

写真で見た Golden Gate Bridge を今バスが走る。快適だ。…コースセンターへ到着する。次々名前が呼ばれている。「どうしよう。大丈夫かなあ」不安と興奮とで鼓動が激しく鳴っている。“Yuriko Sakakibara”呼ばれた。

家中を案内された。驚いたことに、日本の品物がいっぱいだ。そのうえ、奥さんは「池坊」の先生だった。「ここが私たちの寝室です」「これは、私の主人の幼い頃の写真です」と英語でベラベラ。新婚1年というホカホカムードのご夫妻へのお土産は、浴衣、扇子、うちわ、そして夫婦茶碗。これが一番喜ばれた。

ご主人のお帰りだ。洋画で見て知っていたが、この時、私の目の前で… 外国ではごくあたりまえの kiss だ。私はどうしてよいのか戸惑ってしまった。

8:30. 玄関のブザーが鳴る。偶然にも今日はここのご主人 Don の Birthday だったので。私の目の前は外人ばかり。しかも、英語で楽しそうにおしゃべり。私にもいろいろ話しかけてくれる。でも仲間に入っておしゃべりすることが出来ず、悔しくて悔しくて仕方ない。Don の Birthday party というのに、お客様は“Welcome to America.” と言って Beautiful California という本をくださった。とってもうれしかった。

今日はとても長い1日であった。そして、ずいぶん楽しく、驚きの多い1日であった。

7月27日 Wed.

7:30. 起床。自分の部屋のベッドにでもいるようで、ぐっすりと寝られた。Don と Heida は出勤だ。“Good morning. See you later, Yuriko. Bye-bye.” 私は朝食を済ませ洗濯をして、コースセンターへ。家から歩いて5分もかかる所だ。好江さんたちの顔を見てホットため息が出てしまった。

12時まで英語の勉強だ。私の先生は Tom であった。電話での応答の練習。Tom ってとても愉快な先生だ。

午後は自由。というよりも Host family と過ごすのだった。私の家は2人とも働きに出ている。Tom が私のように日中 Host family がいない子(4人)をサンフランシスコの Downtown へ案内してくれた。

Golden Gate Bridge を渡る。道路はものすごい傾斜。この町は丘また丘。どの空からも 360 度の展望が楽しめ

# ELEC 海外英語研修

るという。25セント出しケーブルカーに乗った。ゴシック建築のグレート教会ではパイオルガンを聞いた。礼拝堂全体に響き渡る音色はすばらしい。夕方に近づくにつれて、寒くなつて来た。道路では、コートを着て歩いている人が目につく。

家へ帰ったが、Don も Heida もまだ仕事から帰っていない。ひと眠りする。

“Yuriyo! Yuriyo!” Heida の呼ぶ声。

“How are you?” “Fine, thank you.”

“Have you a good time?” “Yes, I went to San Francisco with Tom.” “Oh, very nice.” …… 1日の報告だ。まだ2日目だけれども、なんとなく相手の言っていることがわかつてきた。うれしいことだと思う。

7月30日 Sat.

11時までぐっすり。時間的にはおかしいけれども “Good morning.” なにしろ、いつも “How are you?” で始まるのだもの。朝食兼昼食をとった。フルーツだ。「あなたは、私から英語を学び、私たちは、あなたから日本語を学びます」と言った通り、2人が一生懸命フルーツの名前を覚える。Suika, Ichigo, Ringo, …… Don ったら Yuriyo の /ri/ が言えて Ringo の /ri/ が言えないのだ。

午後は車で San Francisco へ。今日で5日目。あの有名な Golden Gate Bridge を渡っている。なんだか有名だなんて思わなくなってしまった。

夕食は庭でした。プレイヤーを取り替え、ごきげんな Don. クラシック音楽をかけ静かな食事であった。感激。

12時30分頃までお隣で遊んだ。日本では考えられないことだ。アメリカって想像していた以上に自由だなあ。

8月10日 Wed.

ついに出発の日が来てしまった。

7:00 起床。朝食を初めていっしょにした。これが最初で最後だなんて……。Don と Heida の顔を見ていると「養女にして欲しい」と叫びたくなる。

621 Woodbine. 2週間滞在した家を後にコースセンターに向う。スーツケースの輪の音があたりに響く。「また、ここへもどつて来て欲しい。必ず。」と Heida は涙を浮かべて言ってくれた。Don も家でお別れしたのだが、「必ず来て欲しい。できるなら、留学して、この家から学校へ……」と。

バスが待っている。時間だ。夢中で Heida に飛びついた。バスに乗るなんていやだ。ずっとここにいたい。たくさんもらったおみやげと、スーツケースに入りき

れない程の思い出を詰めて、バスは Terra Linda を去り Yosemite へ向う。涙があとからあとから流れる。Don, Heida どうもありがとうございました。いつまでもいつまでも私はあなたたちを忘れません。そして必ず、機会をつくってこの Terra Linda にある私の第2の家へもどつて来ます。何度心に誓ったかわからない。

(愛知淑徳高校1年)

## 高校生のアメリカ旅行

田 村 泉

この夏、ELEC の高校生海外研修3週間、「サンフランシスコ家庭滞在と旅のプログラム」を引率して、強く感じたことを書く。

### 1. 高校生が英語に慣れていく速さ

家庭滞在（1人1家庭）が2週間という短期間だったのに、ほとんどの生徒が終りの頃には家庭の人とコミュニケーションを取る上で、目立つ変化をなしとげたといえる。

最初は何でもない単語1語を理解するのに、辞書をお互いに開いては見せあいながら20分間も苦労するという状態だったが、終りの頃には聞きとれる範囲がかなり拡がっていったようだ。

以前、大学生グループを引率して、2ヶ月にわたるアメリカ旅行をしたことがある。その時は都合6軒の一般家庭に泊めていただいたが、すべて二、三泊の短期滞在だったので学生たちは英語の体験を殆んどしないとさえいってもよかった。やはり2週間というのは意味のある期間になり得るようだ。

### 2. アメリカ人の hospitality に感激

英語を聴いてかなりわかるという経験をしたといつても日本に帰ればもうそれまでだ。何とか意思疎通はできるものだという手応えだけでも帰ればそれで上等とせねばならない。

しかし生徒たちは、アメリカ人の対人関係のマナーや習慣にすっかり感激して帰ってきた。この方の手応えは、ことによつたら拡大再生産されて長続きする憧れの対象になるかもしれない。

敬語の感覚が何事につけても顕在する日本の「背くらべ文化」の中で、また、独立志向を育てようとしない受験競争という教育環境のなかで、常に満たされない心を抱えている青年たちが、伸び伸びとして精神年齢の高いアメリカの同世代を見て羨ましく思ったとしても当然の話なのだ。

(都立駒場高校教諭)



## 教授法の回顧

ELEC 情報・資料の収集および分析研究グループ

田 中 春 美

ELEC 研究グループの一部門として、英語教育に関連する情報・資料の蒐集および分析を目標とする私たちのグループが発足することになった。当初は同じ大学の有志4人だけに限り<sup>1)</sup>、あまり手を広げすぎない範囲で有益な情報と資料を集め、各人の興味と守備領域に応じたものを分析・研究し、当誌上に報告していくつもりである。もちろん、できるだけ新しい情報・資料を紹介するよう努力するが、あまりそれだけにこだわらず、よいものを見んで取り上げることを優先したい。この欄が、たとえ細くとも長く続くよう、読者諸兄姉のご支援をお願いするしたいである。

まず今回は、発足にふさわしい主題を考え抜いたあげく、これまでの欧米における語学教育の歴史を回顧していくつかの論文を中心に、われわれが現在置かれている座標を考えてみることにした。数多くの優れた先達たちの努力の軌跡を辿ることは、われわれがこれから進むべき方向へのよい指針となり、えてして独善的になりがちなわれわれ教師の不勉強とうぬぼれに対する、よい警告にもなるはずである。

\* \* \*

好むと好まざるにかかわらず、語学教育は言語学の動向に強く影響されてきている。その言語学が、この百年たらずの間に、これまでかつてなかったような激動の時代を経てきた。その余波が、少しずつ遅れて語学教育の分野にも及んでいることは、言うまでもない。カリフォルニア大学のロスアンゼルス校（通称 UCLA）の英語科教授 Clifford H. Prator は、その論文 “In Search of a Method” (*English Teaching Forum* Vol. 15, No. 1, January 1976, pp. 2-8) で、この点を次のように要約している。

... In the course of the [twentieth] century one method has succeeded another in official favor: grammar-translation gave way to the direct method, which was in turn followed by the reading approach. Then came

the Second World War, which brought with it the so-called army method, which under conditions of peace became the audio-lingual approach. This audio-lingual approach—or the aural-oral method, as it was sometimes called—enjoyed almost uncontested supremacy in the United States, and I believe also in many other parts of the world, through the two decades of the 1950s and the 1960s. But no more. (p. 2 より)

このような激動期の只中にあって過去を回顧することは、主観的にならばともかく、客観的にはかなりむずかしい仕事である。大きな変動がいくらかおさまって、落着きを取り戻すことができなければ、変化の波の本質とその影響、そしてその歴史的位置づけを冷静に判断するわけにはいかない。語学教育、特に英語教育の歴史的記述が、1960年末から急激にその数を増しこじめたのも、このような背景を考えあわせるならば、あながち偶然とだけ言い切れるものではなかろう。筆者の手元にある資料を例にしても、それは歴然としている。年代順に挙げると、

Albert H. Marckwardt, “Teaching English as a Foreign Language: A Survey of the Past Decade” *The Linguistic Reporter* Vol. 9, No. 5, October 1967.

Renzo Titone, *Teaching Foreign Languages: An Historical Sketch*. Georgetown Univ. Press, 1968, iv-124pp.

Louis G. Kelly, *25 Centuries of Language Teaching*. Newbury House Publishers, 1969, xi-474pp.

L.G. Kelly, “English as a Second Language: An Historical Sketch” *English Language Teaching Journal (=ELT)* Vol. 25, No. 2, February 1971, pp. 120-132.

1) 南山大学の田中春美、玉崎孫治、大塚達雄、有元将剛。

W.R. Lee, "Ten Years of the Teaching of English as a Foreign Language" *ELT* Vol. 26, No. 1, October 1971, pp. 3-13.

Karl Conrad Diller, *Generative Grammar, Structural Linguistics, and Language Teaching*. Newbury House Publishers, 1971, xi-124pp.

A.V.P. Elliott, "The End of an Epoch" *ELT* Vol. 26, No. 3, June 1972, pp. 216-224.

Steven G. Darian, *English as a Foreign Language: History, Development, and Methods of Teaching*. Univ. of Oklahoma Press, 1972, x-252pp.

K.C. Diller, "Some New Trends for Applied Linguistics and Foreign Language Teaching in the United States" *TESOL Quarterly* Vol. 9, No. 1, March 1975, pp. 65-73.

C.H. Prator, "In Search of a Method"

(上記)

James E. Alatis, "The Past as Prologue" *TESOL Quarterly* Vol. 10, No. 1, March 1976, pp. 7-18.

などである。

このうち, Marckwardt (1967), Lee (1971), Alatis (1976) の 3つは, 回顧の期間が短く (10年), また特定の学会活動に限られているものもある。Titone (1968) と Kelly の 2つの論文 (1969, 1971) は, 力点が伝統的な時代に置かれ, 今世紀後半についての言及はほとんどない。Darian (1972) も, これら 3つよりは新しい時代に力点があるが, 最大の関心は 1880 年から 1940 年の期間にある。したがって, われわれにとって一番痛切な問題となる 1960 年代から 1970 年代にかけての変動については, 残りの 4 つの論文——つまり, Diller (1971, 1975), Elliott (1972), Prator (1976) ——が直接かかわってくることになろう。今回は, そのあたりに話をしぼって考察を加えることにしたい。

John B. Watson や B.F. Skinner が主張する行動主義心理学と, その影響から出発した Leonard Bloomfield や Charles C. Fries らのアメリカ構造言語学を屋台骨として, 第二次大戦中に目ざましい成果を挙げたいわゆる army method, およびそれから発達したいわゆる audiolingual approach は, ミシガン大学英語教育研究所などを通して全世界に広まった。1950 年代までに, この種の教授法は, 少なくとも米国では主流となり, 1961 年に William G. Moulton が次のようなまとめをすることができたほど<sup>2)</sup>, 圧倒的な勢力を占めるようになった。Diller (1971) も Prator (1976) も, 一致してこの Moulton の構造主義的語学教育の教義を引用している。ここでも

それを日本訳で繰り返すと,

- (1) 言語は話すことばであって, 書きことばではない。
- (2) 言語は一組の個人的習慣である。
- (3) 言語そのものを教え, 言語について教えるな。
- (4) 言語は, 母国語の話者が話しているあるがままのものであって, 母国語の話者が話すべきと考えられるものではない。
- (5) 言語はそれぞれ異なっている。

のようになる。学習者の母国語と根本的に異なる目標言語の話すことばのあるがままの姿を, 理屈ぬきの暗記と機械的な大量の練習 (特にパターン・プラクティス) を通して, 学習者の個人的習慣として身につけさせる, army method や audio-lingual approach の基本的特徴を見事にまとめたスローガンである。

ところが, すでに構造主義的語学教育の全盛期においてさえ, これらのスローガンの一つ一つについて疑義がくすぶっていたようであり, その不満が, Noam Chomsky を筆頭とする生成変形文法の勃興とともに, 理論的基盤を得て自信を深め, 1960 年代の末から強い声として表面化してきたのである。たとえば, 話すことば偏重に不満を持っていた者は, 暗黙のうちに生成変形文法家たちが, 話すことばと書きことばを対等の (または対等に近い) 言語表現形式と考えているらしいことに気づかれ, 特に成人の学習者と視覚型の学習者にとって, 書きことばの導入が効果的であることを主張はじめた。また, 言語を単なる習慣と考える点に不満を持っていた者にとっては, 母国語の話者が以前に聞いたこともない文を発したり理解できるという Chomsky たちの観察は福音であり, 暗記と機械的な練習を非難する口実となつた。同様に, 現実の個々の発話よりも, そのような発話や未知の類例を発したり理解できる話者の頭の中にある言語能力, 特に文法規則の体系が重要であるという変形文法家たちの考えは, 言語そのものだけを教えないければいけないという従来の主張を弱体化し, 認知的な学習の可能性を示唆したばかりでなく, 言語の表面に現われたあるがままの姿つまり言語運用の面よりも, 理想化され抽象化された言語能力のほうに, 学習の視点を移す必要性を示した。最後に, Chomsky の推論を基礎として,

2) Christine Mohrman, Alf Sommerfelt, and Joshua Whatmough (eds.), *Trends in European and American Linguistics 1930-1960* (Utrecht: Spectrum Publishers, 1961) の中の Moulton, "Linguistics and Language Teaching in the United States, 1940-1960" より。

特に言語に強い興味を抱く心理学者たちが、子供の母国語習得過程を観察し、どの言語社会でも比較的短期間(4~5年)に幼児が母国語の体系をほぼ完全に身につけてしまう事実を説明するには、人間の言語すべてに共通する特徴つまり言語の普遍的特徴が、すでに幼児に生まれながら備わっていると考えざるをえない、したがって言語間の違いは表面的・部分的なものにすぎない、と結論した。

このように、従来の絶対と思われていたスローガンの理論的基盤がゆらぎはじめ、それに加えて、繰り返しやパターン・プラクティスの単調さと非現実性に対する特に成人学習者の反感、それに伴う学習動機の低下、また聴取と口頭発表に終始した場合にやはり特に成人学習者が示す不安定な定着など、実際的な欠陥も数多く指摘されるようになり、audio-lingual approachに対する支持率は、だいに弱まりつつある。それでは、それにとって代わる有効な語学教授法はということになるが、それが何とも心もとない状態なのである。確かに、言語理論として生成変形文法の優位は動かしがたいのだが、一つにはChomsky自身が1966年に外国語教師の会合で「生成変形文法と語学教育のかかわり」に対する否定的意見を述べたこともあって<sup>3)</sup>、その後この言語理論を基盤とする新しい教授法の確立にかなりの努力が費やされたにもかかわらず<sup>4)</sup>、何かまだすっきりせず、これこそaudio-lingual approachに代わるべき決定的な方法と公言できるものが見つからない。この模索状態を如実に示すのが、目下検討中の4つの論文が推奨する代案の教授法の多様性である。以下残りの紙面を使って、その様子をかいま見ることにしよう。

まずDiller(1971)は、アメリカ構造言語学を代表とする経験主義的立場と生成変形文法を代表する理性主義的立場を比較検討し、次に、前者を基盤とするミム=メム(模倣=暗記)およびパターン・ドリル(文型訓練)中心の教授法と、後者を基盤とする(とDillerが考える)19世紀のFrançois Gouinによるseries methodおよびMaximilian D. BerlitzやEmile B. de Sauzéらのdirect methodとを対比させ、それぞれの特徴を挙げていく。そして、発音を磨くにはミム=メムの教授法が、語彙の増大にはseries method、有意味な文の生成と外国語での思考にはdirect methodが、最も有効な方法であるという結論に達する。つまり、この時期のDillerは、audio-lingual approachの効用を発音面に限り、他のより重要な言語の局面を教える効果的な代案として、より古い時代に発祥したdirect methodなどの再評価を当て、彼独自の代案を提示しなかったのである。それに対して、英

国のElliott(1972)は、行動主義に基づく習慣形成学習理論の全盛期を「画期的な一時期」(epoch)と呼び、1959年のChomskyのSkinner折判<sup>5)</sup>がこの時期の終わりを画したとしている。そして、新しい時代の教授法に対して、彼独自の注文をつけ、言語学・心理学への過大な依存を止めること、学習者たちのそれぞれの必要に照らして学習内容を再検討すべきこと、ドリルや練習問題の言語材料をできるだけ現実の運用に近いものにすること、読書の量をふやすことによって学習者の外国語の経験を深めること、初步の段階の学習者ばかりに専念せず、進んだ段階の学習者の教育にもっと力を注ぐこと、などを提倡した。

これらよりさらに数年を経て、その間に新しい試みやより冷静な反省が重ねられ、残る2つの論文が唱道する新教授法は、前の2つよりいっそう現実味を帯び、構造主義的学習理論とは異なる特徴を示してきたように思われる。まずDiller(1975)は、外国語教育においてもその基盤の言語理論においても、ほぼ意見の一致があった1960年代初頭と比べて、1970年代半ばは一種の混乱状態にあり、あまり原則のない折衷主義が横行していると言う。そして、今後の外国語教育にとって重要かつ改良の見込みをはらむ考え方または傾向として、次の5つを挙げている。まず、Chomskyの言語理論が従来の語学学習理論をくつがえし、教授法としてのミム=メムおよびパターン・ドリルの価値を理論的にも実用的にも低下させたこと、語学教育における文法の重要性が実験も通して再確認されていること、誤りの分析(error analysis)が対照(構造)分析より実用性に富み有効であること、話しことばだけでなく書きことばの有意義な利用も強調されつつあること、以上の傾向に照らして、現在の一時的混乱状態もやがておさまり、新しい評価基準が固まるにつれ、釣合いのとれた一組の教授法と学習技術が備えられるようになること、などである。そして、注目すべき教授法として、「新しいdirect method」とも言える

3) Noam Chomsky, "Linguistic Theory" (*Northeast Conference on the Teaching of Foreign Languages*, 1966, pp. 43-44) より。

4) たとえば、Robert C. Lugton & Charles H. Heinle (eds.), *Toward a Cognitive Approach to Second Language Acquisition* (1971) の中の諸論文や、Kenneth Chastain, *The Development of Modern Language Skills: Theory to Practice* (1971)などを参照されたい。わが国でも、静岡と岩手で変形文法を基盤とする英語教授法の実験がある。

5) Chomsky, "A Review of B.F. Skinner's *Verbal Behavior*" *Language* Vol. 35, No. 1 (1959), pp. 25-58.

Silent Way, Total Physical Response, Community Language Learning など<sup>6</sup>を挙げている。最後に Prator (1976) は、Moulton のスローガンを真似て、最も具体的に新しい教授法のあるべき姿を描いている。紙面の都合で、原文のまま引用させていただく (p. 5)。

1. Teaching is more of an art than a science.
2. No methodologist has the whole answer.
3. Try to avoid the pendulum syndrome<sup>7</sup>.
4. Place a high value on practical experimentation without doctrinaire allegiance.
5. Look to various relevant disciplines for insights.
6. View objectives as an overriding consideration.
7. Regard all tested techniques as resources.
8. Attach as much importance to what your students say as to how they say it.
9. Let your greatest concern be the needs and motivation of your students.
10. Remember that what is new is not necessarily better.

この中には、われわれが自分の座標を定め、独自の教授法や学習技術を開発する上で、十分配慮に価する事柄が、たくさん盛り込まれていると思われる。

(南山大学教授)

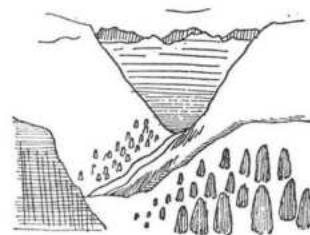
- 6) これら的新教授法については、筆者が『英語文学世界』(英潮社) 1975年7月号に書いた紹介、および『英語教育』(大修館) に不定期連載中の紹介(たとえば、1976年9月号、11月号、1977年2月号など)を参照のこと。また、Earl W. Stavick, *Memory, Meaning, and Method* (Newbury House Publishers, 1977) にも、2, 3のものの詳しい解説がある。
- 7) 極端な意見が流行するたびに、それにつられて右往左往することを、Prator は "pendulum syndrome" (振子症状?) と呼ぶ。

(p. 13 よりつづき)

をかえりみて、日本人がこれまでたどって来た精神の軌跡をもう一度ふりかえって見るべきだと考える。かつての焼け跡にそびえる高層ビルは、今日の日本の物質的繁栄を如実に示しているが、精神の豊かさといったものが感じられないのは私の偏見なのであろうか。生も死もそのなかにいたいて流れるガンジスの水にひたる人たちの姿に、貧しさと汚なさだけを感じる人は、自らの精神の貧困に気づいていないのではないか。

日本人は終戦後からながいあいだ自己の価値体系の欠陥に悩んで来た。生活に追われ、経済発展を唯一の目標としなければならなかった時代として止むを得なかつたかも知れない。だが、現在どんな問題があろうとも、日本人の生活水準が高いことは事実であろう。とすれば、日本人はここらで一步立ちどまり、自らの価値観を見いだすべきだと私は考える。そして願わくば、その価値観は、精神の豊かさと抱擁力をもったものであつて欲しいと思う。そのとき初めて、ニューヨーク、ondon、パリだけを知ることによって「国際人」になれると考えるような「亜流西欧人」は消えて、全人類の相互の理解に貢献できるほんとうの「国際人」としての日本人の姿が見られることであろう。

(立教大学講師)



## エレック選書 最新刊

### ondon の街角から

モービル石油常務 後藤 一正 著

¥ 980

ondon のジャパン・トレード・センター所長として3年9か月にわたって同地に滞在した著者が、日常生活を中心に、新鮮な親しみやすい文章で、イギリスの人々とその社会とを浮彫りにしたユニークな随想集。

ondon 滞在中、目を皿のようにし、耳をそばだて、イギリス人の一举手一投足にまで興味をいただき、人間とその社会のありさまについて、深い愛情と好奇心にかられてバチバチととりまくった心象風景のスナップのアルバム集ともいえる。

## 『訳詞と解説： まざー・ぐーす』上・下巻

吉竹迪夫著、中教出版刊  
四六判、上巻 419 pp., 下巻 386 pp., 各 ¥ 2,000

平野敬一

著者吉竹迪夫氏に私は面識はないが、わが国でマザー・グースに打込んでいたる数少ない研究者の一人であることを、かねてから聞いていた。氏が英語の伝承童謡65篇を対訳の形で編んだ『英米わらべうた・まざーぐーす』(開文社、1962)は絶版になっているようだが、特色ある注目すべき文献として、かつてマザー・グースを解説した評者の小著の参考書目の中に加えて紹介したことがある。その吉竹氏が、この度、その「長年に亘る研究成果」を上下2巻800ページ余りの浩瀚な「本格的研究書」(出版社が本の帯封に付けたうたい文句。著者の表現ではない。念のため。)にまとめあげた。英米伝承童謡の入門的な研究書すらわが国で出版されていない現状を慨嘆してきた評者にとっても、また近年、とみに増えてきたわが国のマザー・グース愛好者たちにとっても、これこそ待望の、まことに時宜にかなった贈りものかもしれない——と、そのような期待を抱かせる大冊である。

マザー・グースの唄に寄せる著者吉竹氏の深い愛情を何人も認めないわけにいかないであろう。著者の「まえがき」によれば、マザー・グースとの実に半世紀近い長い付き合いということである。したがって近ごろのマザー・グースの流行に便乗しているとしか思えない一部の人たちと、氏は類を異にするといわなければなるまい。(もっとも、氏はわが国におけるここ数年のマザー・グースをめぐる動向について——たとえば谷川俊太郎の訳業や私自身の解説の仕事などについて——まったくなにもご存じないらしい。よほどのんきな方か、かたくなな方と察せられる。)

マザー・グースに対する著者の長年の打ち込みの成果をもっともよく示しているのは、おそらく氏の翻訳(氏は「訳詞」という表現を使う)であろう。開文社版では65篇が訳されていたが、今回はそれにも手を加え、上下2巻あわせて186篇を訳出している。(解説文の中にも訳詞が

入っているから、全部で200篇を越すかもしれない。)訳出した量からいえば、優に松原至大、北原白秋、竹友藻風等の先人、あるいは当代の谷川俊太郎などの訳業と肩を並べるものとなっている。たいへんな仕事である。吉竹氏の訳し方は、上記の訳著の中で強いて類比を求めるなら、白秋の訳し方に、傾向あるいは接近法がいちばん近いように思われる。天才白秋の豊かな詞藻に及ぶべくもないが、くせの強い個性的な訳しぶりという点では、なにか白秋とこの訳者に共通したものがある。吉竹氏の言語感覚も現代の谷川俊太郎よりは、昭和初期の訳者たちにずっと近いように思われる(つまり、いささか古いのである)。

186篇、いずれも吉竹氏苦心の訳詞であるが、いかで出来不出来はあるように思われる。吉竹氏の訳の巧みさを示しているものを1篇あげてみる。原詩は

Come, let's to bed,  
Says Sleepy-head;  
Tarry a while, says Slow;  
Put on the pot,  
Says Greedy-gut,  
We'll sup before we go.

これに対する訳詞は次のようになっている(上巻 p.164)。

さあさ 寝よう と  
おねむさん,  
もすこし あとで と ぐずりん坊.  
おなべを かけろ と  
がつがつ屋  
まず まず ひとくち 食べてから.

「おねむさん」、「ぐずりん坊」、「がつがつ屋」などすべて原詩の語義を生かした訳で、うまいものだと感心させられる。

マザー・グースの原詩に数多く登場する固有名詞の訳出にも吉竹氏の苦心がよくあらわれている。眠りの精を擬人化したと思われる“*Wee Willie Winkie*”を氏は「ねんねん寝太郎」(上巻 p.101)と訳しているが、「ね」の頭韻が原詩のWの頭韻とみごとに對応していて、これにも感心した。吉竹氏快心の訳であろう。

かつて白秋は“*Rain, rain, go to Spain*”に「雨、雨、安房(?)へ」, “*Dr. Foster went to Gloucester*”に「医者の西庵(?)さんが埼玉へ」というみごとな「意訳」を例示して、そのことばの天才ぶりの一端を示したことがある。白秋はその訳詩集『まざあ・ぐうす』において、このような意訳を徹底させることをためらったが、吉竹氏は白秋のためらいを乗り越えているようにもみえる。氏は原語の「意訳」をかなり大胆に試みている。たとえば

“In a cottage in Fife/Lived a man and his wife”の原詩に吉竹氏は「防府(防)の小屋に夫婦が住んでいて」(強調点吉竹)(下巻 p.558)という訳詞を対応させている。防府は、もちろん山口県の防府市。「原詞の歩律に思いを致しつつわたし自身の言葉に移す」(まえがき)と氏が言うのは、翻訳上のこういう工夫を指しているのだろう。

しかし、こういう工夫が、すべて成功しているとは思えない。たとえば “Little Boy Blue” を「青ん坊ブルー」としたり、“Little Tommy Tucker” を「とり込みトム君」(強調点吉竹)(これは「と」の頭韻効果をねらったものか)としているのは、まあいいとしても, “Little Polly Flinders” を「こーまいこまっこい子ちゃん」, “Tweedledum and Tweedledee” を「ヤッコラサーとコレワイサー」としているのは、如何なものか。同じく地名の Norwich に漢字の「糊地(糊)」を当てたりしているが、いささか凝りすぎのようにも思われる。訳者が苦労しただけの効果は出ていないのでなかろうか。少なくとも評者には、こういう訳の良さがよくわからない。

しかし訳者としての吉竹氏の特色や個性をもっとあからさまに示している訳詞として、次のようなものがある。(この原詩の意味のとりかたに評者は賛成できないが、ここではそれを問わない。もっぱら訳詞の文体に目を向けていただきたい。) 原詩は例の

Three blind mice, see how they run!  
They all ran after the farmer's wife,  
Who cut off their tails with a carving knife,  
Did you ever see such a thing in your life,  
As three blind mice?

これに対する吉竹氏の訳詞は

めくらの鼠 3匹が 走るのなん。  
追っかけたンだ、肉切りのナイフで 尻尾しつぽ  
ちょんぎられたンで 百姓(ママ)の 女房のあとを  
こういうの あんた 今までに見ましたかいな  
めくらの鼠 3匹てなもの。

この訳し方は、評者の好みにいささか合わないが、こういう鄙びた(?)吉竹流の訳し方を良しとする人もいるに違いない。夢食う虫も好き好き。

以上引例したのは、膨大な吉竹氏の訳業のほんの一部にすぎないが、それでも氏の訳しぶりがある程度うかがえるかと思う。好き嫌いは別として、氏の訳し方が独自の個性的なものであることを認めないわけにいかないであろう。マザー・グースの唄のような単純な形の英詩は、だれが日本語に訳しても結果はほとんど変わらない、という人もいる。これには一面の真理があり、私も

かつて自分の訳した1篇がほとんど谷川俊太郎訳と変わらぬものになってしまい、困った経験がある。吉竹訳は、その点、当代では珍しい、余人の真似を許さないユニークさをもったマザー・グース訳といっていい。結論的にいえば、吉竹氏が186篇の訳詞を世に問う意味は、充分あるように思われる(特に開文社版の氏の訳業が絶版になっている現在)。ただし、その186篇を800ページ余りの大冊にして世に問う必要があったかどうかとなると、疑問である。旧版のように対訳形式で、つまり原詩、訳詞、それに必要最少限の注を付して1冊にまとめた方がよかったのではないかという気がする。そうすれば量は今の4分の1から5分の1、あるいはそれ以下になるだろうが、質的には、ずっとすぐれた、また読者にとっては、ずっと魅力的な著作になったはずである。

もっとも、このような大冊の形をとったのは、吉竹氏が「兼ねて知遇を得た」オーピー夫妻の仕事、特にその『オックスフォード版童謡辞典』の「歴史的な貢献を祖述したい素志」(まえがき)があったからだという。そのため氏は、一つ一つの原詩について、ことこまかにオーピー童謡辞典の説くところを紹介するという労をとっている。オーピーの童謡辞典の解説を原文で読む力をもたない読者のことをおもんぱかったものと思われる。この辞典の他に、19世紀の J.O. ハリウエルの童謡集(復刻本は容易に入手できる)とアメリカの Baring-Gould 夫妻の *The Annotated Mother Goose* も氏の解説にひんばんに登場するが、入手の比較的容易なこういう文献の記述を、ことこまかに紹介する必要があるのかどうか。

もう一つ吉竹氏の著作をこのような大冊にするのに寄与しているのは、氏が一つ一つの唄に、氏の手持ちの絵本がそれにどういう挿絵を付しているか、その構図や人物の表情などについて「敢えてくどく語って倦まぬ」(まえがき)からである。現にそれらの絵本(おおむね市販の入手容易なもの)を所有している読者にとってそれは余計な不用な説明になるだろうし、絵本の現物をもたない読者にとっては、文字だけの説明は、あまり意味がないように私には思われるのだが、氏が「敢えて」この労をとったのは「読む人がおのがじし、rhymeのリズムを主調にして思いの儘の心象風景を脳裡に構成するよがにもなろうか——という念慮に出たものにすぎない」(まえがき)(原文のまま)という。私には、この「念慮」がどうもよく分からぬ。(ついでに言わせてもらうと氏の解説の文章は、その冗長と不得要領という点で、マザー・グースの簡潔さと極端な対照をなすものである。氏も研究対象からついになんの影響をも受けなかった研

者の一人ということになるのだろうか。)

それにもう一つ付け加えるなら、吉竹氏が解説の随所に原詩の韻律についてかなり technical に論じている点も問題だと思う。オーピー夫妻の辞典を原文で読めない読者（本書の想定読者）にとって、たとえば次のような解説はどれほどの意味があるのだろうか。scansion の必要もないような “Rain, rain, go to Spain” の唄に対して氏はこう説く。「(前略)……という scansion でも分明するように、いずれも Trochaic tetrametre ないし trimetre の欠尾詩行 catalexis であるけれども

Fair ;  $\frac{x}{w}$ eathe $\frac{r}{r}$  | come  $\frac{x}{a}$  | - $\frac{g}{a}in$

という wording では行首余剩音節 anacrusis を持っているというべきであろう云々」（上巻 pp. 226-7）。読者はお分かりであろうか。詩法に暗い私には文字通りチップンカンブンである。それに吉竹氏の scansion は独自の吉竹流らしく、上例でも分かるように、英米人のいわば natural rhythm と無縁の場合が多い。極端な例を挙げるなら “Tom tied a kettle to the tail of a cat” ではじまる 4 行の唄（上巻 p.194）に対して、吉竹氏は「唱えながら試みに scan してみると」といって scansion を行なっているが、4 行とも完全な見当違いで、1 行も natural rhythm に即していないのである。奇怪な scansion もあったものである。せめて英語国的小学生にでも原詩を読んでもらったら、もう少しなんとかなったのではないか。読者は、氏の scansion を避けて通るのが賢明であろう。

他に氏の「解説」の柱になっているものに、日本のわらべ唄、あるいは白秋の訳詩への言及、金素雲の『朝鮮童謡選』（岩波文庫）からの数多くの引用（マザー・グースと金素雲の訳詩の類似あるいは呼応は、吉竹氏の発見なのだろうか？）などがあるが、ここで立ち入る余裕はない。ただ、白秋の『まざあ・ぐうす』についての氏の不勉強はいささか気になる。氏はときどき白秋訳の原詩についてあれこれ想像をめぐらしたりしているが、白秋が依拠した原詩の 90% 以上は、すでに明確に identify されているのである（角川文庫版『まざあ・ぐうす』の巻末を参照されたい）。また、あの古典的なニュー・ベリー編の *Mother Goose's Melody* の復刻版（Whitmore の「ウースタ本」）を、この大著を書き上げるまで披見していなかったというのも（下巻 p.787 参照），研究者としては、すこしのんきすぎるようと思う。私自身、何年来このウースタ本や *Tommy Thumb's Pretty Song Book*（大英博物館所蔵本）のコピーを授業などの基本テキストに使って来たし、大学教養課程の学生でも期末レポート

トにこの 2 つの先駆的童謡集の比較研究くらいはまとめているのである。

日本におけるマザー・グース論考の水準は、ここ数年の間に飛躍的に上がってきており（『現代詩手帖』などの特集号を参照されたい）。したがって評者のような啓蒙期（？）の解説屋の出る幕は、もはやない、といつても過言でない。それが現状なのである。吉竹氏は、日本におけるマザー・グース研究（論議）のこういう現状についても、もっと虚心に目を見開く必要があるのでないか。新しい動きを無視すれば、それだけ自分の研究が深化する、というものではなかろう。

オーピー夫妻の仕事が、日本語で充分紹介されていないというのは、たしかに事実だと思う。したがって吉竹氏が私淑するこの夫妻の仕事を「祖述したい素志」をいたくのは、あながち見当違いとはいえない（現にオーピー夫妻の『童謡辞典』の全訳の必要を説く人もいるのだから）。しかし、氏の「祖述」の仕方、あるいは「解説」へのアプローチに、はっきり言うのは酷だが、なにか根本的な弱点があるように思われる。たんに評者との「見解の相違」という問題ではないのである。

繰り返しになるが、この著作は、特色ある吉竹「訳詞」を中心まとめるべきだった。氏の「解説」にどういう意義があるのか、いくら考えても評者には、ついに分からなかった。もったいない話だと思う。

（東京大学教授）

## TWO LIGHTS

Tsutomu Fukuda

The temple bell  
Is ringing.  
The day is ending.  
The evening glow,  
Which has made for a while  
The whole western sky red,  
Is now faded and gone.

I will lighten up  
My darkened room  
With the light of electricity  
And that of verbal felicity  
To heighten and brighten  
My nightly entertainment.

## Testing and Experimental Methods

ed. by J.P.B. Allen and A. Davies  
*The Edinburgh Course in Applied  
Linguistics Vol. 4*, Oxford University Press,  
1977, x+233pp., £6.00 (¥3,840)

浅野 紀和

外国语教育の目的は、目標、方法論に影響を及ぼすが、「何のため」とは理念の問題であり客観的評価は所詮無理である。一方目標方法論は外国语教育が経験科学の一分野という認識に立つ以上、客観的方法を取らなければならぬはずである。教授者個人の過去の経験にのみ基づく主観は、一種の理念にしかすぎないのでいつの間にかそれが目標となり方法論となっている。その例が一昨年、昨年の英語教育論争であった。そこには目標方法論に関して何ら説明しうる客観的資料は提示されなかつた。

人間行動について各人が主観的観察を述べることは自由だが、それが正しいか否かの議論は客観的測定方法によらなければ無意味であるといえる。例えば「知能とは何か」という議論では、各人が諸々の定義を下しうる。教師は学業成績、生物学者は環境への適応能力、また数学者は抽象思考能力だと主張するかも知れない。どのような定義も自由であるが、そのような人間の極く限られた能力の一部しか抽出していない、客観的方法論に基づかない「知能」の定義は、非常に偏頗なものとなる。定義（理念）はどうあれ、方法論が確立していない場合の当然の帰結である。

英語教育においても知能と同様のことがいえる。明確な目標と科学的方法がなければ、知能の例と同じように、英語教育者は教育目的に関する各人の定義をそのまま実践に移していくことになる。とすると英語教育関係者は科学的态度、方法を身につけなければならなくなる。本書の狙いはまさにここにある。

Davies は序において、応用言語学は自然科学の分野と比較して、客観性が乏しく、外国语學習の見解、仮説、結論はいわばその時々の流行によって決定されていると指

摘している。このことは応用言語学には確固たる理論がない、また、あったとしても、理論と実践との間に何ら一貫した関係を成立させえない状態にある。理論と実践の間のみぞは、明らかに、仮説検証という社会科学に不可欠な研究態度が欠けていることから生じている。本書ではこの仮説検証をとりいれることにより、社会科学としての立場を確立しようとしている。しかし外国语教育における測定の客観性は、自然科学のそれとは異なる。血圧を計る場合、器械の目盛りに疑いをかけることはまづない。だが英語教育では、測定自体が絶対に正しいとはいえない。対象は人間が使用する言語であり、多くの変数(variables)が存在しているからである。そのような場合の研究方法とは、変数を制御し検査をくり返すことである。実験と測定、この両者は互に切り離せない関係にあり、この関係を密にし事象を客観的に観察することのみが、外国语教育の姿を明らかにする唯一の道である。このように考えてみると測定の手段、つまり、いかに正確な（妥当性の高い）テストを作るかが出发点であり、それに基づいて実験が可能となり、仮説が検証される訳である。

本書は上記の目標のために二部に大別される。第2、3章では言語テストについての諸概念が説明され、第4～6章では実験研究を実施する上に必要な方法論が述べられている。Testing という言葉は、期末、小テストに代表される形式と狭義に考えがちだが、それだけでは授業との関連の客観的観察は不可能である。何を測定評価するのか、各テスト項目はどうあるべきか、またその内容が授業内容といかなる関係にあるかを知る適切な尺度の知識がなければ、英語教育は有機的体系としては成立しない。この点で第2、3章の測定、評価の諸概念と、それらの相互の関係を知ることが、社会科学としての言語教育には最少限度必要なのである。

日常、生徒の学習活動を観察していると疑問に思う現象に出あう。例えば、聞くことと話すことは不得手にもかかわらず、文法を得意とする生徒、またその逆の場合もある。生徒のおかず誤りに共通した傾向があるので気づく。このような場合、仮説をたてて実験や検査を試みるために、実験の方法や統計の知識が必要である。Lado その他の言語テストの参考書は、この点に関して一切ふれていない。第4～6章は、実験の手順および処理方法に関して有益な知識を提供してくれる。

本書の内容について詳細に論じることを避け、興味を引く項目のみに絞って言及してみることとする。第2章において、Ingram は pragmatic validity という概念を導入している。この validity は immediate と ultimate

validity に分類される。もし test が一連の試験(examination)の結果を正確に予測しうるなら、その test は immediate validity があると考える。一方その一連の試験が、実際に言語を使用する場合の予測因子(predictor)になりうるならば、一連の試験は ultimate validity があるといえる。この二段構えの妥当性に関する概念は、従来の妥当性の種々の分類とは若干趣きを異にしている。第2章で他の興味深い内容は、Norm-referenced (N.R.) vs. Criterion-referenced (C.R.) Testingについてである。両者の類似点と相違点を列挙した後、後者(C.R.)には従来の言語テストの概念を適応できないことを指摘している。例えば Construct validity を採用しなければならないこととか、item and human variability がはいりこんでしまうこと等の指摘である。言語テストに限らず、I.Q. テストや学校の五段階評価等の N.R. Test になれている教師には、C.R. の教育的意義を考えることは、重要であるといえる。すなわち生徒を無理に、正規分布の枠にあてはめ、分類評価するのではなく、目標行動を達成できたかどうかを測ることが C.R. の根本概念なのである。

第3章で注目に値する項目は、各テストをそれぞれ時間の経過から分類している点である。Achievement, Proficiency, Aptitude, Diagnostic Test の概念内容を説明し、さらに、教授細目(syllabus)と時間の流れから、各テストの関連性を説明している。従って各テストの特徴を理解するのが容易である。第5章では信頼性および妥当性の各概念を説明し、上述のテスト、その妥当性、教授目標の関係を図示してある(p.64)。第6節以降にはテスト作成上の諸注意やテスト例が示されている。好ましい例やそうでない例は示唆に豊む内容である。

第4～6章には本書の特徴が現われている。実験をい

かに計画、実施し、処理するかが順を追って述べられ、その過程で統計的概念が具体例の中で説明されている。いきなり統計概念の説明があり、次に数式と例があるといういわば縦の配列である従来の統計書よりも理解が容易である。まず日常観察例をあげ、それらが第4～6章で互いにどのように異なるかを述べ、それぞれに適した実験方法及び統計処理を記述している。特に実験計画方法に関する第4章は、英語教師にとって係わりあいは深い。まず学習効果等の実験においては、変数を制御する必要性のあることを述べた後、次のような例をあげている。L.L. の経験の有無が、外国语を履習している者と履習していない者とに関係があるかどうかという仮説を検証する場合に、どう実験処理したらよいのか、ある処置(treatment)を講じたAグループと、処置のなかったBグループとではどう違うか。また一群の被験者が2種の異なるテストを受けた場合、どちらのテストがやさしかかったかを調べるには、どのような実験手順を取ったら良いか等である。このような例は、我々が日常関心を持っていることであり、その処理記述は貴重な研究方法を説明している。

第5、6章では、上記の例に適した統計処理方法が相互の関連で説明されている。しかし第4章のわかり易さにくらべ、5、6章は統計概念を明確に理解していないと、各統計の式を横のつながりで記述しているだけにむずかしい個所がある。第6章の確率と有意性に関する説明は、むしろ統計入門書を読んだ方が理解しやすい。

本章の評価実験に関するいづれの章でも、各概念は、横の関連で有機的に体系づけられるように記述されている。若干の評価、および統計の知識やそれに対する興味がある者には、既習の概念の整理をする上で、各章の終りの練習問題は有益である。

(神奈川大学講師)

---

(p. 28 よりつづく)

セミナーⅣ 國弘正雄教授を迎えて(8月15日)

このうち、シンポジウムⅣ(岩城・中村両氏の問題提起とそれに引き続く参会者の発言)を除き、すべて英語で行われたことを付け加えよう。このことは、英語(という教科)は英語で学び英語で教えようという JACET 運動と重なり合うものであり、Linguistic Institute 聴講もこの点趣旨を一にするものだからである。

ところで、来年の LSA Linguistic Institute は、9年ぶりにイリノイ大学で開かれるという。そして、JACET は、会場を八王子に戻して第12回目の夏期セミナーを催

すという。Linguistic Institute にしろ、JACET の夏期セミナーにしろ、研修の機会としてこんなによく整ったものはない。まだ参加されたことのない先生方には是非おすすめするし、すでに参加されたことのある先生方には「じゃ、またいづれかの夏あそこで会いましょうナ」と申し上げる次第である。

(ノートルダム清心女子大学講師)

\* \* \*



## ■『語り合う現代』上、下

國弘正雄対談・訳

英語になんらかの形でかかわりをもつ人が必ず一度は悩むのは、「アメリカでは、ハナッタレ小僧でも英語をしゃべっている」という事実についてである。「せっかく英語を身につけても、たかが通弁ではつまらない」というのも、同じ悩みの表明と見ることができる。

そういうことをシタリ顔にいふのは、多くの場合、自分の怠慢ないしは無能のカモフラージュでしかない。しかしそれと同時に、語学の基本的問題をつくものであることも否定できない。それについて、充分に納得のいく説明が加えられたことはないように思える。いや、口先や筆先では、もっともらしいことをいう人が少なくない。みずから説くところを身をもって示す人は、暁天の星のごとくではなかろうか。

「われわれはアメリカのハナッタレ小僧とは違う。だから、内容のある英語を話さねばならん」という人が多い。それはごもっともなのだが、ご本人が「内容のある英語」らしきものを聽かせてくれるわけではない。そのために、「内容のある英語」の実物に接することが少ない。

本書は、その数少ない实物見本を示している。そのことは、語学番組で英語で話したことが、そのまま日本語の一般書としてまとめられても、充分なリーダビリティをもっているという事実に明らかだ。

本書の特色は、それにつきない。収録されている対談は、「トーク・

ショー」のなかでおこなわれたものだ。それはその名の示すとおり、「ショー」すなわち「見せる」という要請の強いものである。それにもかかわらず、「聴かせる」ものになっている。そういうことは、日本語でやってもむずかしい。

このようなわけで本書は、國弘氏が非凡な論客でありタレントであることを証明している。さらに、英語教育のあり方を考えるうえで、いくつかの重要で具体的な資料を提供するものもある。

(日本放送出版協会刊、四六判、上巻261 pp., 下巻269 pp., 各¥950)

(国際問題評論家 金山宣夫)

## ■『続マザー・グース童謡集』

平野敬一編

本書は英語のわらべ唄の中から、歌としてうたえるもの44篇を選び、それぞれに楽譜、訳、語注、解説をそえたもので、4年前に出版された同じ編者の同形式の『マザー・グース童謡集』の〈続篇〉をなすもの。正・統合させてちょうど110篇になるが、その選択の方針は「英語学習者にこれだけは是非知っておいてもらいたいと思われる…英語圏で広く親しまれている…基本的な伝承童謡をとりあげた」と本書の「はしがき」に述べられている通りで、その方針は正確にというか、見事にというか、実現されている。特にこの〈続篇〉では幼少年期をマザー・グースの唄の生きている文化圏で実際に生活された編者ならではの選択が示されていて、初学者のみならずこの分野の研究者も啓発をうける。語注、解説は簡にして要を得ているが、時折、解説の中でされている余談に編者の伝承文化についての造詣の深さが光

っている。しかし、本書の最大の価値は、楽譜つきのわらべ唄集という点にあろう。英語わらべ唄の選集は、わが国ではこれまで数は少なかったとはいえ、現在まで翻訳や対訳などかぞえてみると結構出ているが、楽譜つきというのはこれがはじめてであろう。英語わらべ唄は本書の編者も言われる通り、単にとなえるだけのものも多いが、歌としてうたうものもそれに劣らず多いのである。從って、生きた姿でこれをとらえるには当然、本書のような形の選集もなければならない。その意味で本書の価値はひじょうに高い。ただ、ひとこと望蜀の言をそえると、たとえば‘Twinkle, twinkle, little star’ ‘What are little boys made of?’ ‘Hickety, pickety, my black hen’など、ここにそえられている楽譜以外に、それと同じくらいボビュラーな別の曲でもうたわれているわけで、それらもあわせて収められていたらと思う。それには Alfred Moffat の4冊本 (Galliard) や Elizabeth Poston の1冊本 (The Bodley Head) などが役立つと思うが。

(ELEC 出版部刊、B6 判、162 pp., ¥980, カセット ¥2,000)

(立教大学教授 吉田新一)

## ■『スコットランドの民話と伝奇物語』上、下

G・ダグラス著  
松村武雄訳

大正年間に出了たという『世界童話大系・蘇格蘭編』の復刻である。上巻に37話、下巻に38話が、旧漢字旧かなづかいで収められているが、半世紀以上たった今日でも、伝承文芸資料としての価値はまったく失っていない。

19世紀のスコットランドには、著名な民俗学者や民話採集家が輩出した。本書の原著者 G. ダグラスもそのひとりだが、彼がその材料を求めるという J. F. キャンベルが特に著名である。しかし、後者のフィールド・ワークは西ハイランド地方に限定されたという理由から、訳者はダグラスのものを採ったらしい。下巻の後半に、ウェールズ、ブリタニー、マン島などのものが約10話収められているが、これらを含めて、ケルト文化圏の伝承がうかがえて興味深い。

たとえば、「ブラウニー」2話をはじめ、多数の妖精譚が収められており、原著者の妖精論とともに、ケルトの幻想性をよく伝えている。わずかな例外を除いて、各話とも、4、5ページにまとめられ、無駄な修飾のないきびきびした文体で、民話の特徴もよく出されている。

ただ、「解題」の中で言う、スコットランドの土地は余りにも陰うつて、「(イングランドにくらべて) より多くの、そしてより厳しい敵意を含んでいる」などといった先人感が、話型選択にもかなり働いているようと思える。

評者はどこかでも書いたことがあるが、イギリスの冬は、暖流の通路にあたるため、北へ行くほど気温が高くなる。夏は日照時間が長く、陽気で明るい面もあり、これらの特徴が民話にあらわれるのも事実である。愉快な笑話なども多く聞かれるのである。さきの、キャンベルを下敷きにしたものの中で、本書に訳出されたものは、ほとんど2次的な動物昔話であり、スコットランド民話を代表する「呪の逃亡譚」とか、もっとスケールの大きい叙事詩的ロマンスが省かれているのは、いかにも残念である。また、「……お寺の鐘が、悲しい響きをたて始めました。そし

て真白な衣を纏(ま)うたお坊さんが、鐘の音にあはせて、お經を読み出しました。……」などという表現は、それなりの面白さはあるにしても、異国の風土を伝えるうえで、やや難があるような気がする。

(現代思潮社、四六判、上巻173pp.、下巻189 pp.、各¥1,400)

(岡山就実短期大学助教授  
三宅忠明)

## ■『外人はつらいよ』正・続編

ドン・マローニ著  
脇山 怜訳

合併会社丸紅ハリス印刷機械株式会社副社長として1970年から76年まで6年間滞在した著者が *Japan Times* に “Never the Twain...?” の題で2年半に亘って書き続けたコラムを単行本にまとめたものである。正編は “Japan: It's Not All Raw Fish” として昨年8月に発行され、これに収録できなかった分が続編として “Son of Raw Fish” の題で本年2月発行された。『外人はつらいよ』正・続編はそれぞれこの日本語訳である。

これまでに多くの日本人論なり日本文化論に関するものが日本に滞在した外国人によって書かれそれが日本人の高い関心を呼んで来た。そして読者は何らかの形で日本文化の特異性といったものを改めて認識させて来た。この著書も「青い目の見た……」の範疇に入るのに違いないがこれまでのものとは何か一味も二味も異っている。もっとも著者は日本人論などというものを大上段にかかげて取り組んだ訳ではない。日本という、自國と大きく文化を異にする国の中で日々遭遇するとまどいや失敗を、著者一流のユーモアで綴ったコミカルなタッチの日本体験

記といったものである。それでいて我々日本人には充分考えさせられるところの多い本である。それはマローニ氏自身の体験に留まらず、マローニ夫妻と子供あわせて6人の家族ぐるみの滞日奮戦記であったところに、その体験記の厚み、豊かさが加わりそれだけに面白い。随所に出て来る著者と夫人の会話はかつての漫画「ブロンディー」さえ思い起こさせる。

笑いばかりではない。歯に衣着せぬ批判がある。日本人ばかりにではなく、時には在日アメリカ人にも向けられている。正編ではそのユーモアも勇みあしに感じるところもないではないが、100kgを越す巨体の著者がおどおどしながら周りを見、手探りで異質の文化になじもうとする努力の中での嘆きや、絶望、やがてその文化の違いがあったからこそ日本での生活が楽しめ、この上なく親しみを感じるようになる著者の心の推移が、続編も併せて読むことによって理解できる。“Son of ~” の題名に隠されているかも知れない忌々しさも、せっかくここまで親しんで来た日本を離れる著者の気持が表わされているような気がする。

著者の観察のこまやかさ、エッセーの構成のうまさは、単にビジネスマンとしてだけではなく、ジャーナリストとして正規の訓練を得た人であったればこそである。それに著者のユーモア——最も日本語に移し難い言葉のアスペクト——をこれ程までに難なく日本の読者に伝えることに成功している訳者の英語力はもとより、現代感覚を自由に操る日本語力に深い敬意を払いたい。これから海外に翔く若い人たちには是非読んでおいてもらいたい本である。

(PHP研究所刊、四六判、正編253 pp.、続編257 pp.、各¥830)

(ELEC研修部長 山本庄三郎)

『日本語と英語——翻訳のために』 一色マサ子著 B6判, 190頁, 980円 荒竹出版

翻訳とは、一般に外国人を意識しないで書かれた文章を、文化的背景、思考様式、発想のパターンの異なる異質な言語に転移させる作業といえる。日本語から英語、および英語から日本語への翻訳に際しての本質的な問題点を、主に文学作品の場合を例にとって実際的に指摘し、さらに詳しい索引によって日英比較語法・表現事典としても役立つようになっている。

『日本を紹介する英会話』 トニー植松著 B6判, 207頁, 800円 ジャパンタイムズ

日本社会の特徴や「日本人的考え方」に関する20のテーマを、日本人と外国人あわせて3人によるポイントについて、しかもユーモア感覚のある会話を収めた、実際に外国人と接する機会の多い人にとって示唆に富む有益な会話例文集。

『電話の英語はこわくない』 橋本光郎著 B6判, 195頁, 780円 創元社

基本的な英語力があれば英語の電話で苦労しないですむという考え方から、電話英語の注意と42の場面別対話の実例を配した実践的なテキスト。

『たのしい口語英語』 ブライアン・ハレット／岡野敬子共著 新書判, 151頁, 650円 研究社出版

実際の会話でよく使われるのに日本人にとっては最も

難かしいものの代表としてget over, break in等の「動詞+前置詞または副詞」の表現があげられる。基本的な句動詞表現を240精選して例文をあげ、マスターし易いように工夫して配列されている。

『ジェスチャの英語』 中野道雄著 B6判, 177頁, 780円 創元社

日本人に理解しにくい英米人のジェスチャーのうち、主に文学作品、新聞・雑誌にあらわれた例を収集して解説し、あわせてジェスチャー研究の周辺についての論文を収めている。

『外交の英語』 三浦和一著 四六判, 330頁, 1,600円 研究社出版

今日、外交においては英語が主に用いられていて、しかもその性質上の確であると同時に微妙な裏の意味も含まれるという高度の英語が要求される。第1部では条約、公文書から外交表現の代名詞ともいえる婉曲表現、パーティでの英語にいたる「外交の英語」を豊富な例文とともに解説し、第2部では100頁にわたって外交関係用語を収めている。

『工業英語の語法』 篠田義明著 四六判, 320頁, 1,800円 研究社出版

科学技術の情報を正確に理解するために、工業英語の特徴を文法項目別に分類した例文を中心に作文上の注意を含めて解説している。

### 『英語展望』 バックナンバー

#### No. 59 1977年秋季号

- 在外研究での体験から ..... 稲垣 忠彦  
南半球への旅 ..... 宮本昭三郎  
否定の論理と意味 ..... 太田 朗  
退いて内を固める——変化する

- 国際社会と日本経済 ..... 國弘 正雄  
Understanding Spoken English

- ..... Gretchen E. Weed  
バラッドの世界(その9) ..... 平野 敬一  
英語の諺(その7) ..... 戸田 豊

#### No. 58 1977年夏季号

- テレビ映画で見た感覚・習慣  
のずれ ..... 小暮 和男  
中野健作先生のことなど ..... 後藤 一正

仏英独の旅に想う ..... 國弘 正雄  
Intensive English Course

..... Douglas W. Overton

Oral Approachに関する実態調査(II)

..... ELEC教材・教授法研究グループ  
高校段階のPattern Practice ..... 大橋 菊子  
バラッドの世界(その8) ..... 平野 敬一  
英語の諺(その6) ..... 戸田 豊

#### No. 57 1977年春季号

生活に Relevantな英語を ..... 脇山 恵  
パネル・ディスカッション: どんな

英語を学ぶべきか ..... K. バトラー・W.

グロータス・比嘉正範・中尾清秋・國弘正雄  
小学校からの英語教育 ..... 久富 節子  
Oral Approachに関する実態調査(I)  
..... ELEC教材・教授法研究グループ



## 展望 通信

### ◆ICU 冬期言語学セミナー

講 師 Dr. John Ross, M.I.T. 教授

講演日程 (登録受付は毎回当日の12:30~1:00)

昭和53年1月28日(土)

- 1:10 The sound of meaning
- 2:30 Myopia—a general principle relating to markedness

1月29日(日)

- 1:10 Silence in poetry
- 2:30 Brevity is the soul of everything: how silence is used to mean
- 3:50 Wording up: the search for basic sentence types

2月4日(土)

- 1:10 Why are there word categories?
- 2:30 Niching—how parentheticals get placed between words

2月5日(日)

- 1:10 The syntax of some intensifiers: even, also, only and like
- 2:30 Two vies of The Elephant: transformationalism and lexicalism

会 場 国際基督教大学理学本館 2階 220号室

会 費 入会金 1,000円、参加費 1日 1,500円

申込及び問い合わせ先

〒181 三鷹市大沢3-10-2

国際基督教大学語学科言語学研究室

井上和子、村木正武

### ◆日本英文学会新人賞

日本英文学会では創立50周年記念事業の一環として、新進研究者のための賞を設けることになった。この新人賞は、新進による英米文学・語学研究を奨励するために設定するもので、入賞者ならびに論文は選評とともに『英文学研究』に発表され賞金5万円が与えられる。

応募締切 每年4月末日 (ただし第1回は1978年5月末日)

提出先 〒162 新宿区中町18 日本英文学会事務局

- 応募資格 1. 該当年の4月末日（第1回の場合は5月末日）現在満33歳未満であること。  
2. 応募論文は過去に活字に付されたものであってはならない。  
3. 応募者は日本英文学会会員でなくともよい。

論文審査 『英文学研究』編集委員会がおこなう。

なお、投稿規定その他詳細については 〒162 新宿区中町18日本英文学会（電話 03-267-8263）に問い合わせられたい。

### ◆昭和53年度イングリッシュ・ギャラクシー

開催期間 3月25日—28日 (3泊4日)

会 場 YMCA研修所 東山荘 (静岡県御殿場)

費 用 35,000円

詳細については、〒107 渋谷区代々木2-23-1 ニュースティート・メナー1358 トミー植松語学センターに問い合わせられたい。

### ◆第13回 ELEC 英語教育研究大会

第13回 ELEC 英語教育研究大会は11月5日(土)ELEC会館において開催され、参加者約400名をえて盛会裡に終了した。

会は清水護 ELEC 運営委員長のあいさつをもって始まり、ミシガン州立大学準教授 今村茂男氏の“English Education in Japan as Seen from Abroad”と題する講演と、埼玉大学付属中学校新島義平教諭による実演授業、分科会等が行なわれた。

### ◆1977年度 ELEC 賞授与

本年度の ELEC 賞はつきの研究論文に対し授与された。

「英語に興味をもたせる指導法の研究」

愛知県岡崎市立南中学校 山浦昭雄氏  
なお上記論文は本誌次号(61号)に掲載される。

### ◆1978年 ELEC 春期英語教育研修会

目 的 中学校、高等学校の英語科教員を対象として、その資質向上のための研修を行なう。特に英語の運用能力を伸ばし、専門的教養をたかめ、英語教員としての指導力の向上をはかる。

期 間 1978年3月22日(水)~28日(火)

会 場 大学セミナーハウス (東京都八王子市下柚木)

募集人員 60名

参 加 費 55,000円

なお詳細については、〒101 千代田区神田神保町3-8英語教育協議会S.P.係に問い合わせられたい。

## ◆ELEC 中学生・高校生コース

### 研修目的 中学生コース

指導経験豊かな外国人講師のもとに生きた英語・正しい英語に接し、学校で学習した英語をもとに実際の運用能力を高め、外国人と直接コミュニケーションする喜びを味わわせることを目標とする。

### 高校生コース

すでに習得した英語力を高等学校で現在習得しつつある英語力をふまえ、正しい発音を確実に身につけ、日本人一般の弱点である聞き、話す力の不足を克服し、内容豊かな表現力を習得を目標とする。

研修期間 1月12日～4月7日

研修時間 4:20～5:50 1週2日（中学生コース=月・水、高校生コース=水・金）

研修料 中学生コース 41,500円

高校生コース 45,500円

## ◆ELEC 海外英語研修

### ミシガン州立大学英語研修旅行

旅行期間 7月24日～8月22日

英語研修 ミシガン州立大学英語研修センターで3週間

旅行費用 670,000円

募集人員 40名

対象 教員、一般社会人および学生

### オックスフォード大学英語研修旅行

旅行期間 7月22日～8月19日

英語研修 オックスフォード大学で2週間

旅行経路 ロンドン～オックスフォード～エジンバラ～インペネス～ニューキャッスル～ロンドン～パリ～ジュネーブ～ローマ～アテネ～東京

旅行費用 738,000円（概算）

募集人員 15名

対象 教員、一般社会人および学生

### 高校生のためのアメリカ英語研修旅行

旅行期間 8月1日～22日

英語研修 サンフランシスコにおいて3週間。なお研修期間中は各家庭に滞在する。

旅行費用 413,000円（概算）

募集人員 30名

対象 高校生

上記各コースの詳細については、〒101 千代田区神田神保町3-8 英語教育協議会 海外英語研修旅行係 あて問

い合わせられたい。

## 編集後記

本誌の創刊号より第59号まで、編集主幹をつとめてくださった中島文雄先生が引退されました。創刊号が出たのは1961年の4月でしたから、ちょうど17年もの歳月が経ったことになります。

想いおこせば、1960年の12月のことだったでしょうか、編集子が本誌の創刊の企画をミシガン大学に留学中の山家保先生に書き送ったところ、たまたま同大学に行っておられた中島先生に相談されて、「中島先生も雑誌の創刊に賛成しておられる」というご返事をいただきました。

雑誌の在り方については、教科書会社が教科書に付隨して発行している機関誌とは違ったものにしたいという願望が強くあって、商業主義に基づく宣伝臭のないもので、しかもELECの活動、特に、オーラル・アプローチについて英語科教員を啓蒙するということが骨子になっていたように思います。

発行所も、創刊号から第9号までが大修館書店、第10号から第28号までが学習研究社、第29号からはELECへと移りかわり、この号から『英語展望』という邦名がつけられました。この時の編集会議に「国際的視野を広め、国際感覚を身につける」ための記事を多く入れることを提案されたのは中島先生でした。

先生は各号の編集会議後も、その後の進捗状況を電話で問い合わせて下さることがしばしばあり、その度に、先生の『英語展望』に対する愛情の深いことを知り身のひきしまる思いがしました。

これからは、朱牟田夏雄先生が編集主幹として俊才ぶりを發揮してくださることになりました。そして、今まで紙上にはお名前は出ませんでしたが、太田朗先生は引き続き従来通り編集委員として協力してくださることになっております。

Q. Q.

英語展望 (ELEC Bulletin)

第60号

定価 530円 (送料 120円)

昭和53年1月1日 発行

◎編集人 朱牟田 夏雄

发行人 酒井 杏之助

印刷所 大日本印刷株式会社

発行所 ELEC 出版部 (財団法人 英語教育協議会)

東京都千代田区神田神保町3の8

電話 (265) 8911～8916

振替・東京 3-11798

# ELEC

THE ENGLISH LANGUAGE EDUCATION COUNCIL, INC